
殺人鬼に憑依したら聖処女と共に戦争に巻き込まれた

真庭烏賊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼に憑依したら聖処女と共に戦争に巻き込まれた

【Nコード】

N3437Y

【作者名】

真庭烏賊

【あらすじ】

何処を読んでもある意味時効ともいえる死亡フラグをもつ雨生龍之介に憑依してしまった引籠り。そんな彼の前に現れたのは青髭ではなく聖処女であった。更新は不定期。感想お待ちしております。

召喚（前書き）

浮気性分ですが末永くお願いします。

召喚

「あっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ……う、うええええええ！
」

……ど、どうも。子供の死体に囲まれて絶賛嘔吐中の雨生龍之介です。

え？雨生はそのくらいで吐くか？そりゃ……本来の雨生なら狂喜乱舞してるだろうが、残念ながら俺は憑依してしまった引籠りだ。

それでも普通はテンプレキターー！！とも言っているかもしれないが、生憎其処までこの惨劇を見て喜んでも居られない。

第一に不味いんだよ……サーヴァントの召喚に成功しているらしい。なんか風が吹き荒れていてそこら辺のものが中に舞っているんだよ。

ホントに不味い！このままキャスター……えつと青髭だっけ？この「Fate/zero」って物語はまだ見終わってないし……何よりあんな狂った奴なんか来て見る！俺の精神がマッハだぞ！！
まずいますまずい……こうなったら！！

「来いサーヴァント！！こうなったら自棄だ！！」

すべてを受け入れるしかねえだろ。

其処に光臨したのは白き聖女。

鎧に守られて尚神々しさに満ち溢れていた。

「サーヴァント、キャスター。呼掛けに応じ此処に召喚されました。

」

声も凜として聞惚れてしまふ。・・・なんて、なんてこった。トンでもない者が来たものだ。こんな汚れきつた俺を浄化しそな瞳に魅入られていく。

「問うましょう。貴方が私のマスターか。」

「は、はい聖女様！！」

知らず内に膝を着き頭を下げていた。

「・・・よろしいでしょう。契約は成立した。卿の願いも確かに聞き届けた。此度の勝利、神の導きと共に。」

この言葉を聴きハツとした。

青髭・・・通称、ジル・ド・レイのことである。フランス百年戦争の英雄にしてフランス元帥になった男。晩年に黒魔術に没頭し何百人ともいわれる幼い少年たちを拉致、虐殺した殺人鬼。のちにペロアの童話に登場する殺人鬼青ひげのモデルとなったと言われている。

・・・OK把握。本来コイツが召喚される予定だったんだろ。

そして、イレギュラーともいえる自分の存在に召喚が間違いを起こす・・・うん此処まで大丈夫だろ。

そして俺・・・どっちかというと、あの殺人鬼（原作龍之介）よりもはるかに善人っぽい俺によりキャスターが代わってしまった・・・という事か。

つまり目の前に居る聖女は・・・青髭を触媒としてきて尚且つ少女・・・ってことは！！

「き、きききさ・・・んっん。貴女はもしや・・・オルレアンの？」

「はい、わたしの真名は、ジャンヌ・ダルク。オルレアンの乙女とも呼ばれたものです。」

ここに、一つ。そして、最後のサーヴァントが現れた。これにより、第4次聖杯戦争の幕が上がったのだった。

【クラス】キャスター

【マスター】雨生龍之介

【真名】ジャンヌ・ダルク

【性別】女性

【身長・体重】162cm・40kg

【属性】秩序・善

【ステータス】筋力E 耐久C 敏捷E 魔力B+ 幸運D 宝具

A++

【クラス別スキル】

陣地作成：E

自らに有利な陣地を作り上げる。

道具作成：D

魔力を帯びた器具を作成できる。

本来セイバーポジションだったが処刑時魔女と呼ばれた為キャスターにもなれるがキャスターとしては低ランク。

【固有スキル】

神託：A+

神の託宣により、その状況での適切な判断ができるようになる。

ランクA+の場合、効果は常時発揮される。

カリスマ：B

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

Bランクは、一国の指導者でない者としては破格であると言える。

透化：D

無私の心。精神面への干渉を無効化する精神防御。

神々の加護：A

危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

一見名当：B+

サーヴァントを見ただけで真名を当てる能力。B以上で魔眼の領域。

召喚（後書き）

次回。ウェイバー、ランサーを召喚した。の巻き

因みに

【宝具】

とりあえず三つの予定。

1、旗

2、自分自身

3、磔

・・・かな？

此れだというものがあつたら感想のほうで待ってます。

威風（前書き）

ウェイバー君のサーヴァントが決まりました。正体は作中で。

あと、宝具は劇中出てきたときに紹介します。

威風

「斬れ！！」

敵君主の言葉を聞き、この世から消える事が分かった。

目に入る世界が途切れる刹那、走馬燈が頭を駆ける。

あのお方の世界・・・人愛の世界を叶える事が出来ず去る自分が恨めしい。

救いがあるならば・・・もう一度、あの桃の園で三義兄弟の盃を交わしたかったが。

「是非も無い・・・さらば！兄じゃ！！」

ここに、一人の将が堕ちたのだった。

く冬木の一角

陣の染料として用意した鶏たちを殺し、その生き血で召喚用の魔方阵を描いていく。そして手順道理用意し、確実に条件を満たしていく。

「閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。繰り返すつどに五度、ただ、満

たされる刻を破却する——」

触媒はなんとかオークションで落した算盤の珠。これはなんでもかの英雄が作った算盤の珠らしい

何のクラスであれ彼は召喚の呪文を唱えて行く。

もしも、かの英雄が現れるなら勝ったも同然。

自分は、知らず不敵な笑みを浮かべていた。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ——」

内面は儀式を行うために冷静を保ちつつ、燃え盛る情熱が意思と感覚を明敏にする。

「——誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——」

最後の呪文を詠唱し、魔方陣の中央で魔力が循環と寸断を繰り返し、エーテルの暴風が巻き起こる。陣の文様が赤く紅く朱く染まっていく。

夕陽のように、血のように、燦然と輝いていく。

「さあ来いっ!!」

陣の内側が外界と繋がった。英霊の座と呼ばれる時間と切り離された領域に。人の身で精霊と同格となり、人を超越した最強の霊長たちの集う場へ。

そして・・・

眼を焼き尽くさんとする閃光に思わず後退し、身を圧する風に遂に負けて尻を着く。侮様にも地に這いずり、ただそれらがおさまるのをひたすら待つ。

——やがてその光りの中心に、ヒトのカタチをした影が色をなす。

「・・・問おう。貴殿がそれがしの主・・・か？」

現れたる巨漢は自分の背丈を軽く超え、何よりも紅顔で二尺の見事な顎鬚を蓄えていた

ましてや、手に持つ青龍をあしらった巨大な大刀はまさに彼の尊重たる宝具であると一目で分かった。

「サーヴァント・・・ランサー。主を確認。いざ、共にこの戦争に生き残り勝利の美酒に酔わん。」

そう言うランサー・・・いや、関羽は豪快に笑ったのだった。

「——はははは。」

不意に笑みを零した。

何という、戦士。

堂々たる風貌で、自分をマスターと認識してくれている。

こんな、

こんな、

召喚如きに腰を抜かした自分に勝利をもたらすと言ってくれている
！！

ならば！！

「ああ！よろしく頼むぞ！！ランサー！！君の武を自分に預けてくれ！」

そう言うランサー笑いをやめ、自分に膝をつき

「承知！！」

と交手して誓ってくれたのだった。

此れより自分、ウェイバー・ベルベットの聖杯戦争が幕を挙げたのだ。

【CLASS】ランサー

【マスター】ウェイバー・ベルベット

【真名】関羽 雲長

【性別】男性

【身長】207cm

【体重】120kg

【属性】混沌・中庸

【ステータス】筋力B+ 耐久B+ 敏捷A- 魔力D- 幸運C- 宝具A+

【クラス別スキル】

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

【保有スキル】

一騎当千：A

一対多人数を想定した戦場における戦術的直感力。師団クラスの敵対勢力、または相手の
対軍宝具・対城宝具に対処する場合に有利な補正が与えられる。

神性：B-

神霊適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神霊との混血とさ

れる。

死後千年以上、大陸最高位の神霊の一柱として祭られている。また、元々人間であつた身から神になつた希有な例。

騎乗：B

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。

黄金律（偽）：B

身体の黄金比ではなく、算盤を発明し商売の神と崇められていることから得たスキル。商売の成功によって一生金銭で困ることはない。

威風（後書き）

という事で関さんです。実は魏延とどちらかに迷った拳句、ランサーの優勝候補としてなにより、三国志好きな自分の為に彼のものがランサーに成りました。

次回。槍兵、酒を喰らいて獲物を待つ。
殺人鬼、聖処女と共に初陣の場所へ。

の巻き

初戦（前書き）

とりあえず前哨戦みたいなものを。

次回から戦いが！！

初戦

代わり映えのないプレハブの並ぶ倉庫街、まばらな街灯が照らすそこは大型車両の運行も考慮された4車線のアスファルト。そこに聖杯戦争の参加者が一組、場所をとっていた。

「なあ・・・ランサー」

そう言つて隣で一人酒を仰ぐランサーに問いかける。

「ん、ん、ふゝむ。どうした主よ。」

なんだと酒を一旦中止いて此方を望みこんできた。

「どうしただあゝあ？・・・なに呑気に酒飲んでんだよ！！スカポ
ンタンが！」

と今出せるだけの怒声をランサーの鼓膜にぶつけたのだった。

所変わつてキヤスター組

「んゝむむ。」

俺こと龍之介はゆっくり目を覚まし、天井を見ながら自分の顔を触

る。

「・・・ないな、今まで其処にあったニキビも、無精髭も。」

やっぱりリアルに成ってんだなーとつくづく思ってしまった。

ふと右を見ると簡素な棺桶に入っている子供達の死体が見える。とりあえずこの子達は警察に知らせておこう。

そう思い、とりあえず体がだるいから二度寝する為左に体を預けると

「・・・くう。」

・・・

・・・

・

「何寝てんだキャスター!!!!」

「きゃん!!」

とりあえず寝返った顔の傍にキャスター涎を垂らして寝ていたのどついつい蹴り飛ばしてしまった自分は悪くないと思う、丸。

「自己完結しないでくださいよ。うう、玉のお肌が傷ついたらどうするのですか。」

とりあえず聖杯よ、妙な知識をサーヴァントに与えるなと思い、そ

のまま熟睡したのだった。

目が覚めると空は茜色に染まっており、もうすぐ日が落ちる頃合いだった。

そこに。

「！！！！マスター！！！」

そう叫んで此方に飛んできたキャスター・・・おい。

「急かすな、つーか服着ろ。服！！！」

こいつ何、風呂入ってんだ？！女の子は風呂が好きなのか？！？

「え？・・・うえ！！！」

そう小さく叫ぶとすぐに魔力で騎士甲冑を着こなす。

そうして顔を紅くしながら進言する。

曰く、サーヴァント同士の戦いが始まったとのこと。

確か、原作だとランサーVSセイバーだったっけ？

ま、とりあえず。

「いくぞ、キャスター。百聞は一見にしかず。場合によっては漁夫の利だぜ！」

「は、畏まりました。」

そういうと霊体化して魔力を辿っていくのだった。

というか、戦いの時だけキッチリしているんだな。ジャンヌ・ダルクって。

再びランサー組。

2騎のサーヴァントが向き合っていた。

一人は銀と紺碧の鎧を着こなす最優のサーヴァント、セイバー。

もう一人は緑の軽鎧を着こなす最速のサーヴァント、ランサー。

互いに獲物を構えて間合いを計っていた。

いかに武神と謳われたランサーでもセイバーの一撃を浴びてしまえばそこで終了である。相手が女でも手加減するほど余裕なぞ彼女の力量の前に無かった。

セイバーもそうであった。聖杯の知識により、相手の武器と容姿で真名が分かったものの其れゆえに後一步が出なかった。

互いに一合一撃の勝負に持ち越そうとしていた。

「どうしたセイバー。まさか臆病風に吹かれたか。」

「貴殿こそ、その青龍偃月刀は飾りか。」

互いに軽く罵倒するも効果なしだった・・・其のとき。

「双方、武器を収めよ。王の御前である。」

雷鳴と共にもう一組のサーヴァントが姿を現したのだった。

初戦（後書き）

短めですが投稿しました。

感想待ってます。

勧誘（前書き）

連投・・・疲れた！！

勧誘

全員の瞳が東南の空を見る。

「・・・戦車」

セイバーの傍にいた女性、アイリスフィールの言つとおりそれは古風な戦車だった。

もちろんただの戦車ではない。

本来馬が引くはずの戦車を牽いているのは牡牛、たくましい筋肉を躍動させながらも美しい牡牛だ。

それが壮麗な戦車を牽いて空中を駆けながら近づいてくる。

しかもただ浮いているわけではなく、牡牛の歩みと車輪に紫電を迸らせている。

こんなものを扱えるのは間違いなく英霊だろう。

放出される魔力を考えても宝具以外に考えられない。

戦車の宝具を乗りこなせる者がいるとすれば一人だけ、聖杯の召喚に応じた七騎のサーヴァントの一人、ライダーのクラスによって呼ばれたサーヴァントだろう。

空を翔る戦車は居丈高に頭上を旋回しながら速度を緩め、地上に降りてきた。

戦車に乗っている騎手の姿が確認できる。

巨人かと見間違えるほどの筋骨隆々たる巨軀を持ち、軽い鎧とマントを装備し、髭を生やし見るからに「でかい」大男。
放たれる圧倒的な威圧感はまさしく霸王と言っても過言ではない。
その口元には不敵な笑いがあつた。

男は戦車を操作してセイバーとランサーの中間に降り立つ、その位置は二人の戦闘を邪魔する形だ。

ライダーは二人のサーヴァントを見るとトンでもない事を叫んだ。

「わが名は征服王イスカンダル！此度の聖杯戦争ではライダーのクラスで現界している。」

全員が啞然とした。

聖杯戦争によつて重要な意味を持つ真名を自分から明かす英霊が居ると思つていなかったのだ。

其処に

「ぐ……何を考えているか！ライダー！！」

ライダーの戦車から出てきた人影が急に声を荒げた。

神経質そうな容貌をした髪をオールバックに纏めてコートを纏った鼻もちならない高慢な態度をした恐らくは魔術師であろう男性。

ただ、其の自慢のオールバックは少し乱れており本人は鼻を押さえていた。恐らく此処に来るまでに鼻をぶつけたのであろう。

他にも

「いたたたた・・・」

怜悯な美貌を持った赤毛の女性がいた。

二人の名は時計塔きつての天才魔術師ケイネス・エルメロイ・アーチボルトと、名門ヌアザレ家の娘でありケイネスの婚約者であるソラウ・ヌアザレ・ソフィアリであった。

「まったく、余もつまらんマスターに召喚されたものよな。全く窮屈でたまらんわい。余と共に前線で戦うことだけは評価するがそれも女の目を気にしてのことでは、な・・・」

「黙れライダー！！」

と、原作のライダー組では見られない剣呑な雰囲気が出てきたのだった。

其の時

「く、っは~~~~~・・・く、苦しい。って、もう終わっちゃったのか！！」

突然の第四者の声に其の場にいた者たちが一斉に声の元に、振り返ったのだった。

其処にいたのは一見、見た目のいい青年であった。何故此処に？迷ったのか？皆が思考の渦に入りかけたとき、

「おお！すつげー！！すつげーぜ、キャスター！こいつら全員英雄なのか！！」

この言葉で皆が構えた。奴は、

「は、そのようですねマスター。」

キャスターのマスターであると。

この空気を破ったのは他でもない。

ライダーであった。

「おお！！忘れておったわい。聞けい、者ども！！・・・うぬらは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが・・・矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。ここはひとつわが軍門に降り、聖杯を譲る気はないか？さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を制する快悦を共に分かち合う所存である。」

そう宣告したのだった。

サーヴァント、そしてそのマスター達も絶句したのだった。あまりの突拍子のなさにセイバーは怒りを通り越して呆れ果て、ランサーも話についていけず途方にくれて、キャスターはただジツとしていたのだった。

いきなり現れて真名を名乗り、拳句の果てに一合もやりあわぬうちから自分に仕えろと勧誘してくる。

「つぶ、はっはっはっはっは！！すっげーよ！あんた、COOL過ぎて冬、Winterだぜ！！な、な、キヤスター。あいつの真名って何だっけか？！」

「はい、先ほど名乗り挙げていたので……誠なら征服王イスカンドルとの事。」

他の参加者たちは龍之介を不審な目で見ていたがそれ以上に龍之介もテンパっていた。

と、心でないでいた。出てきた所が悪くまさかあの場所に来てしまったとは……唯、ライダーはそんな龍之介を見て一言。

28

・」と呟いていたのだった。

少し、時間が空き。先の問にランサーが答えた。

「貴殿の問の答えを返そう、我が忠義を侮辱するでない！」

と一喝したのだった。関羽と言えば生涯、蜀の王にして漢王朝の末裔劉備玄德一人に忠誠を尽くしてきた男。曹操に囚われても自らは漢に屈して曹操に屈した訳ではないと猛然に言い放ち、孫権に囚われては降服を聞かず斬首された経緯を見ても決して下るなど言うわけが無かった。

「……そもそもそんな戯言を述べ立てるために、貴様は私とランサーの決闘を邪魔したというのか？」

問いに答えるセイバーの顔には表情はない。ライダーを睨みながら切っ先を向けている……どうやらライダーの提案がよほど不愉快だったらしい。

「戯言が過ぎたな征服王、騎士として許しがたい侮辱だ。」

本人は戯言などではなく徹頭徹尾本気なのだが……セイバーとランサーの殺気に挟まれたライダーは、

「むう……」

とうなりながらこめかみを指で掻いている。
それでも威風堂々とした態度は微塵も揺るがないのだからこの男も

只者ではない。

最後にキャスターは、

「・・・王とは商人である。故に人など道具としか見れぬ愚物。そんなものに誰が仕えるものか。今は唯、今世のマスターと私を導く神のみが私の仕える者だ。」

と言い放った。

「・・・待遇は応相談だが？」

「くどい！」

ライダーの提案・・・と言って良いものかどうかは一瞬で切り伏せられた。

どうやら二人とも真剣勝負の途中で水を差されたことがよほど腹に据えかねたらしい。

場合によつてはセイバーとランサーそしてキャスターにライダー一人で立ち向かうことになりそうだ。

「重ねて言うなら、私もまた一人の王としてブリテン国を預かる身だ。いかな大王とは言えど、臣下に下るわけには行かぬ。」

「ほう、ブリテンの王とな？」

セイバーの物言いにその正体を悟ったライダーが破顔する。

「これは驚いた。名にしおう騎士王が、こんな小娘だったとは！」

「その小娘の一太刀を浴びてみるか征服王」

小娘扱いされたのが気に入らなかったらしい。

セイバーの殺気がその濃密さを増す。

刀身から湧き上がる闘気が語っている。

「こりゃー交渉決裂かぁ。勿体無いなあ。残念だなあ」

どうやらライダーはこれが交渉だと本気で思っていたらしい。

ライダー以外は決裂して当然と思っているが、本人は本気で残念そうだった。

「それはそうとキャスターよ、さっきの言い方は酷すぎるぞ。このままではセイバーすら敵に回しかねんぞ？」

とキャスターに問いかける。同時にセイバーもキャスターを覗く。

其処には憎悪に引き立てなれたキャスターがいた。

「・・・ふん。王など所詮恩知らずだ。私が仕え王にまで申し上げた勝利王なぞ捕虜となつた私を見捨てた。たかが金品との交換を拒否し敵国に売り払ったんだ。誰が信じるものか！私が信じるのは、聖カトリヌ・聖マルグリット・聖ミシエルの三神とマスターのみ。それ以外なぞ、知った事か！！」

と叫ぶとキャスターはローブを脱ぎ捨て剣を構えた。白き鎧に美しき金髪、どこかセイバー・アーサー王に似ているが、その紺碧の瞳が荒々しく濁りそうに成っていた。

「ンな！勝利王でその三神の名・・・ま、まさか、キャスターの真名は！！！」

「そうだ！我が名はオルレアンの乙女、ジャンヌ・ダルク！！いくぞ名だけの王よ・・・我が恨みを思い知れ！！」

「は・・・ま、まてよキャスター！・・・ったく。しつかたねーな、おい其処のオールバック！サーヴァント同士遣り合っの見てもつまんねーだろ・・・いっちょ、や・ら・な・い・かい。」

ここに、キャスターVSライダーの異色戦争が幕を挙げたのだった。

救国の英雄か

征服王か

勝つのは誰なのかここに居る者たちには知る者等いない。

・・・だが

「フン、王の庭で戯れるのはいいが・・・この我を無視し続けるなど、私の懐具合も限界があるぞ！」

其の言葉ともに何十の何かが飛来してきたのだった。

勧誘（後書き）

というわけで楽しんでいただけましたかな。

ジャンヌの王嫌いは、史実と俺の妄想が混ざっているものなので気にしないほしい・・・な。説明するのが大変だしね。ではいずね。

聖処女の宝具（前書き）

宝具の説明。

ストーリーは明日以降になります。

聖処女の宝具

ジャンヌ・ダルク

宝具覧

聖少女の戦功^{オルレアン}

ランク：C + 種別：対人宝具 レンジ：？ 最大捕捉：- - 人
オルレアンの解放と勝利王シャルル七世の戴冠の両方が成し遂げられた戦功によって得た名声が宝具になったもの。

自らの真名を知るものが多いほど外部から取り込む魔力の回復力を早くする事が出来、魔力の枯欠を防ぐ。またこの状態の時、持っている宝剣：聖女の祝福剣^{サン・カトリヌ}の効果が発動。任意で筋力・耐久・俊敏の内二つのステータスを2ランク上げる事が出来る。しかし、使用中『百合と天使が舞う先陣旗^{ラ・ビュセル}』を使用する事が出来ない。

百合と天使が舞う先陣旗^{ラ・ビュセル}

ランク：B - 種別：対軍宝具 レンジ：1 ~ 60 最大捕捉：1000人

由来：ジャンヌが持ったとされる天使と百合の描かれた三角旗及びオルレアンの包囲網の突破したことが由来。味方を鼓舞することによって、味方は幸運・俊敏のステータスが1ランク上昇し、透化：Dと同等の精神耐性を得る。しかし、>矢<と>火<の攻撃に弱くなる。また、使用中『聖少女の戦功^{オルレアン}』がしように出来なくなる。

火刑の磔^{シュンヘ}

ランク：A + + 種別：対軍宝具 レンジ：1 ~ 50 最大捕捉：700人

「全てを委ねます」と辞世の句を発動の呪文とし、炎を発現させる。その間は<火>の属性を持つ攻撃を無効化し、炎がジャンヌの身を

焼いている間、全ステータスをA++状態にする。
戦闘後、勝利敗北と関係なく、ジャンヌは消滅する。

フレイド・ストーム
百年戦争

ランク：EX 種別：対軍宝具 レンジ：1～99 最大補足：1000人

救国を胸に共に戦場を駆けた戦友達が、サーヴァントとして召喚される。

召喚されるのはいずれもマスター不在のサーヴァントだが、それぞれがEランク相当の『単独行動』『透化』スキルを保有し、最大30ターンに及ぶ現界が可能。しかし、召喚する時、左腕を消滅させるか令呪を一つ消化させないといけない。固有結界でもあるが、この世界はジャンヌの記憶の再生のような物である。そのため魔力の消費は他の固有結界よりもいいが、龍之介の魔力では持つて10分前後と考えられる。

聖処女の宝具（後書き）

次はランサーの宝具紹介

関聖帝君の宝具（前書き）

関羽の宝具紹介です。

関聖帝君の宝具

関羽 雲長

宝具覧

『青龍偃月刀』

ランク：A - 種別：対人宝具 レンジ：2～5 最大捕捉：1人
普通の武具だが本人のシンボルであったため、宝具として昇華された。

純粹に武具としての性能が高く、オプションとして使い手に『魔力放出』のスキルを与える。

また、あらゆる盾宝具を一撃で破壊する事が出来、サーヴァントの身に纏う鎧すら何も無いが如くすり抜ける事が出来、生身を斬る事が出来る。

これは、多くの兵共を斬つて来たことで手に入れた技術な為魔力の消費を防ぐ事が出来る。

『桃園の誓い』

ランク：A + 種別：召還宝具 レンジ：- 最大捕捉：2人

かの義兄弟の契りの逸話。

一日に一度、常時発動型の召還スキルによって義兄弟を召還する。
召還された関羽、張飛、劉備の3名は8人目以降のサーヴァントとして聖杯戦争に参加し、特例として既存のサーヴァントとクラスを重複することを許される。

劉備・張飛も同じ宝具を所持していることから、事実上の蘇生宝具として機能するため、同じ日に全員を撃破しなければならない。ただし、劉備・張飛・関羽はこの宝具以外使う事は出来ない。（武器を振るえるが効果を発揮する事は出来ない）また、この宝具を使用する際令呪を二つ消費する。

『赤兎馬』

ランク：A 種別：対軍宝具 レンジ：1～5 最大補足：1～1
0人

生前の愛馬であつた英霊馬 赤兎馬の召喚と騎乗。この騎馬に騎乗している間、全ステータスはワンランク向上し、命中判定と物理攻撃に対する防御成功率が2倍になる。『青龍偃月刀』の効果を上げる事もできる。本来ランサーがライダーとして召喚された時に搭載される宝具だが関羽の死後、後を追って死んだ逸話からどんなクラスでも呼ぶ事ができるようになった。

三国志演義によると赤兎馬は稀代の名馬で燃えるように体が赤く、一日に千里を駆けることができるとされた。

関聖帝君の宝具（後書き）

では明日また合いましょう。

火炙（前書き）

ジャンヌについて書きたい事を書いたつもりです。

異論は認めない。

火炙

突然と何十もの剣戟が振ってきて其処にいたサーヴァント達を蹂躪していったのであった。

「我を差し置いて、『王』を称する不埒な賊が、よもや二人も湧くとは・・・だが、一人はこの馬の骨とも判らぬ雑兵に手傷を負い、もう一人は犬と戯れる。いかに有象無象の雑種とはいえ、仮にも『王』を僭称する程度には名を馳せた猛者であるのに、嘆かわしいにも程があるぞ。」

整い過ぎた相貌。紅蓮に輝く双眸。金色に輝く甲冑とその偉容。口元に浮かぶのは、侮蔑と傲慢さであった。

其の声に真っ先に反応したのは間一髪攻撃を免れたライダーであった。

「難癖をつけられてもなあ？ イスカンダルたる余は、世界に知れ渡る征服王にほかならぬのだが？」

「たわけ。真の王たる英雄は、天上下に我ただ独り。あとは有象無象の雑種にすぎん」

あまりにも度を越えた放言でありながら、それを超える自尊心と傲慢さがその言に説得力を与えている。

ライダーの度量をもつてしても、アーチャーの高慢さは手に余るものであったらしい。二、三、考えるような仕草をしたのち、溜息をついてから口を開く。

「そこまで言うんなら、まずは名乗りを上げたらどうだ？ 貴様も王たるものならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？ 雑種風情が、王たるこの我に向けて？」

話を通じない。しかしそれはなんとなく全員が感じていたことだ。この男はたとえマスターであろうと他人の言うことを聞かない気がする。

「我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら・・・そんな蒙昧は生かしておく価値すらない！！」

アーチャーの左右の空間が歪む。

まるで浮き出てきたかのように姿を現したものに全員が息を呑んだ。剣と槍が一本ずつ、施されている装飾や感じ取れる魔力の量から明らかに宝具だ。

アーチャーに選ばれるには投擲に秀でていなければならない。

弓が得意である必要はないが強力な長距離攻撃が可能なのが条件だ。

アーチャーが攻撃状態に入っただのを見たほかのサーヴァントたちは皆迎撃の構えを取り、マスターたちは息を呑んだ。

其処に

「待てって、待てよ王様。俺に良い考えが浮かんだ！」

そう叫ぶ男がいた。龍之介であった。

「なんだ、犬の飼い主が。私の采配を邪魔するか。」

そういうとアーチャーは剣先を龍之介に向けた。

「そうそう！ 実は考えたんだ・・・なんかキャスターの話だとアサ

シンって奴はもう死んじゃったんだろ？そしたら残りは後一人。だつたらここは呼んであげたらどうよ。さっきまでセイバーとランサーは殺し合ってたし、キャスターはライダーを斬りたいらしいし・
・此処は早いもの順でバーサーカーと戦ってから残りをやるってどうだ！！」

とトンデモない事を言い放った。

「・・・おい雑種。この王たる我に狂犬と遊べというのか・・・冗談でも笑えんぞ。」

そついうと更に何十もの武器を空間から引つ張り出したのだった。

「おいおい・・・まあそうだけだよ、王様。ここは重要だぜ！！なにせ王は自分ひとりって言っても実際戦わないと分かんない。けど雑魚と戦ってはつまらない・・・だったらトーナメントにして最後に勝った奴が王様だ！！て叫べじゃいんじゃね？！」

此処に来てサーヴァント達とマスター達は理解した。龍之介という男・・・聖杯戦争をまったく知らないと！たまたま、運良くジャンヌ・ダルクという一級品のサーヴァントを召喚したド素人だと！！

「どうよ、王様！！もしくは最後王様同士の決闘でよくね？王って名乗った人たち・・・ちやうど散らばってるしさ！」

龍之介の言った通り、騎士王を名乗ったセイバーはランサーと・征服王と名乗ったライダーはキャスターと。

そして自分こそが真の王であると豪語したアーチャーには・・・と

言おうとした時。

新たな魔力が入ってきた。

全身を覆う鎧は闇よりも暗い黒、長身で肩幅の広く面貌にしても兜に隠れていて見えない。

間違いなく言えるのは、これほどの魔力を発散しているものが人間の範疇に収まるものではないということだ。

「・・・やつべー！！すつげーぜおれ！！まさかホントに来ちゃったよ！！！！マジで俺・・・天才じゃね。」

と予想が当たったのがうれしいのか龍之介はキャスターの手を取り、一緒に跳ね踊っていたのだった。

「ちょ、マスター！！や、やめ！！！」

訂正。キャスターは恥ずかしがっていた。

こうして、自動的にアーチャーがバーサーカーと戦う事となり、皆の緊張が緩んだ所に

ドス！

鈍い音が響いた。

「・・・ハレ??？」

龍之介はふと腹が痛いと思い下を見ると・・・銀色の液体が自分の腹を抉っていたのだった。

「マスター!!」

キャスターはすぐに銀色の液体を斬りかかると液体は生きているが如く、すぐに持主ケイネスの元に戻ったのだった。

「これこそ我が最強の礼装、月霊髓液である。まあ、もぐりのマスターにわざわざ使ってあげるのだ。さっきのマスター同士で戦うというのは嘘っぱちかね？」

そういうと銀色の液体・・・水銀の入っている壺を自分の足元に置き呪文を唱えていく。

そして、

「斬!!」

「がは!!」

呪文が終り、水銀を刃とし龍之介の体を打ち払ったのだった。

宙に舞った龍之介はたまった物ではなかった。

「（や、やっぱり調子こきすぎたな・・・糞つたれ・・・）」

龍之介・・・に入っていた自分はその時の光景に興奮していた。小

説の中にいた史実でも有名な英雄たち。それが目の前に実際に喋っている。気難しい王様にすら語りかける事が出来たのだ。おれってある意味英雄じゃねっと思えた。昔はこうなるんだとよく吠えていたな。ドンと激しい音とともに走馬灯が駆けていたのだった。

「マスター！しっかりして下さい！マスターッ！」

キヤスター・・・ジャンヌが俺を揺すってくれる。なんか背中が痛いと思うと凹んだコンテナが見えてくる。

よく見ると涙を流していた。

それを見た後、俺の目元は暗くなったのだ・・・

「おいこら！！どういう所存だ！！ケイネ「令呪によって命ずる！ライダー、キヤスターを殺せ！！」スグお！！」

紫電の走ったライダーは失望の顔以外浮かぶ事が出来なかった。不意打ちでキヤスターのマスターを攻撃し、あまつさえ貴重な令呪で王たる自分にキヤスターを殺せと命ずる。心中、今回の遠征は難航だなっと思付くのだった。

「・・・すまない、キヤスター。謝っても謝りき「あっはっはははははははは！！！！」・・・ど、どうした！！」

発狂したように晒うキヤスター・・・しかし、其の背後に磔が見えてきた。

「御主・・・死ぬ心算か!!」

「・・・貴様に分るか?! 私の気持ちか! マスターが私を一人の英雄として、人として見てくれたことを!! ああ、そうだな。お前たちから見たらマスターはある意味異端も異端だろうなあ。何が人間皆平等よ? 神の神告が聞こえたら異端? 女で捕虜だから犯しても罪にならない? 数々の戦功も魔女だから白紙?! なによ!! 私が何したって言うの!!...ただ、戦を早く終わらせたかった。国を救いたかっただけなのに。そんな・・・そんな当たり前な事を思う事すら許されないのか!!!!」神よ!!!!」

キャスターは何を言っているかも分らないほど錯乱しながらも呪文が解放されようとしていた。ある意味ジャンヌ・ダルクを象徴し、魔女裁判におけるもつともポピュラーな処刑方法、火刑。

名を『火刑の磔^{シロヅメ}』自ら業火に塗れ、全ステータスを極限まで高め最後灰となる悪手の宝具である。

そして、呪文が完成しようとした。

『神よ、あなたに全てをゆ』

「何ほざいて言やがりますか!!」

カッン!

小石がキャスターの頭に当たり、其処を見守っていた龍之介がコンテナを背中にしながら体を支えていたのだ。

「おいキャスター！お前言ったじゃねえか。この戦いにおいては神告の巫女である自分を封じ、軍人として前に出るってよ！！たく。イキナリ約束破る所か、かってに死のうとしやがって馬鹿やろう・・とりあえず少し寝る！！キャスター後を何とかしろ！」

そついうと龍之介は目を瞑り・・夢の世界に入ってしまった。

「・・・ふ、なんと難しい課題か。いいだろうマスター！その難関、見事に突破してくれん！！」

そつ叫ぶとキャスターは磔を消滅させ、もう一つの宝具を開帳させた。

「いくぞライダー！『聖少女の戦功！』オルレアン」

急激に魔力の流れが変わった。宙に舞っていた色々な魔力がキャスターに取り込まれていくのだった。此れこそジャンヌの今までの戦功によって名声となり、現代まで其の名が広まった事により宝具に昇華したもの、聖少女の戦功であった。

「・・・これでマスターからの補給が無くとも戦える、いくぞ貴様ら！我が剣にて恥を知れ！」

「ふん、なにを言い出すかと思えば・・・ライダー、キャスターを攻撃しろ。私は其の間に・・・な、何だ！！」

キャスターのマスターを殺そうと水銀を操るもウンともスンとも動かなかった。

「な、なにが起きている！！答えるキャスター！」

「フン、簡単な事だろうに・・・これが我が宝具の力だ。この宝具の力は自らの真名を知るものが多いほど外部から取り込む魔力の補充が出来る。そんなチンケな魔力を帯びているものからも吸い取る事が出来るのだ。代わりに魂食らいは出来ぬがな・・・ま、する心算も無い。」

「つ、つまり其の宝具がある限り魔術はすぐに不散してしまうのか！？くそ、ライダー！宝具の開帳をゆる「知った事か！！」な、なにいい！！」

「もう、堪忍袋の尾が切れたわい。ワシのやる事に口を挟むでないわ！！」

そう、ケイネスに怒鳴りつけると剣を構えキャスターと対峙したのだった。

「・・・ライダー風情がセイバーのマネですか？」

「そういうお主も今は魔術師風情ではないか？」

「ふん、、違いないな・・・行くぞ！征服王！！」

「来い、救国の戦乙女よ！！」

こうして、再びライダーVSキャスターの一騎打ちが始まったのだ。
った。

其の頃龍之介は夢の中で・・・

「始めまして・・・私がわかりますかな？」

と、本来のキャスターに出会っていたのだった。

火炙（後書き）

次回、俺的ジルさんの思い。また、龍之介強化をお送りします。

緊急アンケート（前書き）

一寸ばかりメールや感想で聖杯戦争は西洋の英霊しか出せない。という人たちが多い為ランサーに関するアンケートをとらせてもらいます。

緊急アンケート

スイマセン、関羽でもいいのではと思うのですが、前書きのような人たちがいるためここは皆様に決めてもらおうと思い開催させてもらいます。

1、いや関羽で大丈夫！

2、関羽じゃ駄目・・・と言うか西洋の誰かが良い！

3、素直に四次か五次のランサーでOK??

です。

2を選んでくれた人はランサーになるべき人を書いてください。

とりあえず候補としては、スカサハ・ヴラド公（怪物化前）・オイフェの誰かを考えてます・・・自分としては関公で行きたいですがね。

緊急アンケート（後書き）

タイムリミットは明日の正午12:00までです。

アンケートのご協力、お願いします。

懺悔（前書き）

龍之介ゝ進化！！

アンケート結果！！関さんで頑張っていきますので応援よろしくお
願いします。

懺悔

暗い・・・クライ・・・くらい・・・そんな空間の中・・・

なんか知らんが俺は浮いていた・・・

いやなんでって、足が着かなかつたら浮いてるほか無いだろう？

「どうかしましたか？リュウノスケ？」

・・・うん、現実逃避はすんだな。

「ハジメマシテ・・・キャスターといったほうが良いか？それとも・・・青髭の旦那の方が好みか？？」

俺の目の前に居る人に向かって言った。

奇抜な黒いローブを着たイケメン。肌の色は不健康に白く、両の目が飛び出すかと思うように見開かれてギョロギョロと動いている。

このイケメン・・・いや、ギョロメン事ジル・ド・レイに。

「ええ、そうですね。ハジメマシテですね。リュウノスケ・・・に憑依した人間よ。」

つけ、やっぱばれているか。

「何故かって、あれほど私を慕っていてくれたリュウノスケにしては目の色が透明でしたからね・・・」

そうかい。んじゃ。

「どうすんだ？俺を殺すかい。そんなときや・・・」

と俺はポッケに手を突っ込んだ・・・よし、バタフライナイフはある。

これは特殊だね、キャスターにクラス別スキルの道具作成で作ってもらった特別製だね・・・と言おうとした時

「殺す??何を言っておりますか!!リュウノスケ!!私は・・・私はとても感謝しているのです!!ジャンヌを・・・有り難うございます!!」

へ?・・・俺何かしたつけ?

「ジャンヌを・・・私はもしかしたら盲信しすぎたかも知れませんが・・・あんなふうに笑っているジャンヌを、私は初めて見ましたから・・・」

そついうと、水晶玉に映像を流す・・・あれは、召喚した時の。

あん時はやばかった・・・マスターと言った瞬間、斬りかかって来たからな・・・涙流しながら。

そして、壁に俺を叩きつけて泣き叫んでいたな・・・

曰く、

「なぜ・・・何故こんな事したか!!」

「私が魔女だからか!魔女を呼ぶ為にこの子達を生贄にしたのか!!」

「私は好きで魔女になったのではない!!ただ・・・神の導きと共に国を救いたかっただけなのに・・・」

「神は・・・私を拒絶するのか・・・王と一緒に、神も人を・・・私を道具だと思っているのか・・・」

ンで、其の後俺が撲って逆転した所で、SEKKYOしたんだっけな

「てめえ一人で救った気になってんじゃねえ!!ナルシストかよてめえは!!一人で世界救えたら英雄なんてこの世にいないんだよこのボケ!!」

「第一、王様つてのは国の為なら自分も、信頼する奴も切り捨てなきゃいけない存在だろうが。何でもかんでも頼り切ってんじゃねえ

「!!」

て、感じでお互い殴り合つて・・・いつの間にか一緒に簡易的な棺桶作つて子供を入れて供養したんだっけな・・・拝んでる時のキヤスターマジで可愛かったのは内緒だが。

「確かに可愛いですね、リュウノスケ。」

「心読むな!! んで、あんたが此処に来た理由は何だ？」

「・・・わたしは恥ずかしい・・・あれほどジャンヌを救うために、復活させる為にあれだけ生贄を捧げた・・・それが彼女を傷つけていた・・・何たる無様!! 私は・・・あの頃の私をコロシタイ・・・!!!!」

「・・・そういえば何百人ともいわれる幼い少年たちを拉致虐殺したのは一重にジャンヌを復活させる為、そしてだからこそ黒魔術に染まっていたんだっけな。」

「そこで私は考えた!! このような醜い姿では彼女に会うことは出来ない・・・しかし、彼女の力になりたい!! そこで!!」

と旦那が本を渡してきた・・・うわ、人の皮で作られてるな。

「これは我が盟友、プレラーティの遺したこの魔道書『螺旋城教本』でございます。この力は深海の水魔の類を召喚して使役でき、本自体が魔力路としての機能を持っております。御陰で、術者の魔力に関係なく大魔術、儀礼呪法レベルの術行使を可能にする素晴らしいモノ！！どうか此れをもつて彼女の力になつてもらいたい！！」

・・・あなたすげーよ。赤の他人・・・ましてやあなたを慕っているリュウノスケを事実殺したような男に、ジャンヌの為だけに盟友の本を渡せるなんて・・・でもよ。

「わりい・・・受け取れない。だが！・・・あんたの覚悟はもらつた！！絶対にキャスターを・・・ジャンヌ・ダルクをハッピーにさせてやるよ！！だから、一緒に来いよ！きつとキャスターも望んでいるさ！！！」

「・・・あなたは優しい・・・しかし、それは出来ない。彼女の中にいる私は、騎士としての、戦士としての・・・彼女の右腕だった頃の私こそが・・・相応しいのだ・・・」

・・・旦那あ。

「・・・ふむ、ならばリュウノスケ。令呪の無い腕を見せてください。」

え・・・と思つたが取り合えず右腕を差し出した。すると旦那がつて

「うええええあああああああ！！！！！」

な、な、なななんあああああ。

「だ、旦那が右腕に!!」

吸い込まれた!!

（いえいえ、大丈夫ですよ・・・ただ、リュウノスケの右腕に取り込んだだけの事。）

あ、なんか、模様が・・・百合の文様が出てきたな・・・そういえば戦功で家紋に百合を入れることを許可されたんだっけ？当時、王家の紋章百合だったらしいし。

（此れは一度だけ、私を呼ぶ事が出来る仮令呪です。一度だけなので使いどころは見極めてください。）

そ、そうか・・・

（後、呼べるだけなので腕に話しかけても私は反応しませんよ。あと、召喚時間は一日限り・・・では、リュウノスケ。また合える日を。）

そして、目の前に光が見えてきた・・・それじゃ戻りますかね。日常（戦場）に!!

懺悔（後書き）

龍之介の右インジルの旦那！！

はっはー！この展開、読めた奴はいまい！！ほんとには本を持たせた
ったのだが・・・きずいたらこうなった。まあ、本人が召喚
したほうがいいかもしれないな。因みに騎士時代のジルさんはキャ
スターの固有結界の中にいますので大丈夫です。アンケート有り難
うございます。

強奪（前書き）

今回、原作から外れます！！思いつきり外れます！！後悔の無い様に・・・

強奪

取り合えず、情報確認・・・

俺・・・なんかキャスターの魔力が逆流しているっぽい。御陰で出血は止まっている。・・・うん、少し走れるくらいかな。さて、サーヴァント戦はどうなってるかなあ。

セイバーVSランサーは・・・ランサーが圧倒していた。

すっげー！！一合で吹き飛ばすランサーはすげーけど、コンテナが貫通するほどの力で吹き飛ばされて尚立ち上がるセイバーも凄いな・・・その近くでバーサーカーっぽいのが横たわっているのが見えた。確か、アーチャーが引いた後、セイバー殺しに行くんだっけ・・・そこをランサーに邪魔された挙句、気絶中か。

そして、我がサーヴァントのキャスターVSライダーは・・・互角だな。

いい剣戟の色を奏でながら打ち合う両者・・・その近くで雑音張りにギヤーギヤー言っているのを無視すれば金払ってでも見たいオーケストラになるだろう。

いいなあ・・・これが、戦い。あの聖杯戦争か・・・。

あれ？なんか？？

忘れている・・・？！

そうだ、主人公！！

衛宮切嗣・・・セイバーのマスターであり魔術師殺しの異名を持つ暗殺者。

待てよ、主人公にとって今危険視するのは誰だ・・・その誰かの傍に誰かいるのか・・・

そうだ！！原作でも隙についてランサーのマスター殺そうとした男だ！！今のランサーのマスターはウェイバー・・・原作でも無防備なマスターの一人だ。

・・・やっぱり、ランサーの戦いに見入ってる！！やばい！！
仕方ない、取り合えず話そうとして・・・

パン

ウェイバーの胸に鮮血が舞った・・・

>ランサー組<

何だ・・・これ。

「主iiiiiiiiiiii!!!!」

ランサーの声が聞こえる・・・くそ、キャスターのマスターの件もあつたのに油断した。取り合えずここは、ランサーと共に引こうとして

斬

左手を刈られた・・・

>ランサー組・終<

左腕が舞った……水銀によって……マジでか！！！！

「ふう、魔力の密度を上げる事であの小細工をどうにかできるかと思っただが・・・存外巧く言っただな。ソラウ、やってくれ。」

「え、ええ。解ったわ．．．」「閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）」。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。繰り返すたびに五度、ただ、満たされる刻を破却する——」

紡がれたのは、聖杯戦争の関係者なら直にわかるであろう呪文・・・召喚の呪文である。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」
 ・ ・ ・ これで私は
 ランサーのマスター、って訳ね。」

……状況判断決定！逃・げ・る・べ・し！！と其の前に……

「唸れ！野球魂！！英語にするとベースボール・ソウル！！」

そうしてスライディングしながらウェイバー君を確保。

「キャスター！！撤退、否！！後ろに向かって全力全身！！！」

「了解しました。マスター！！」

そう叫ぶとキャスターは俺を捕まえてコンテナの上へと飛び乗った。

そこで聞こえたのは

「令呪に告げる、主変えに賛同せよ。重ねて令呪にて告げる、自害を禁ずる。」

「ぐ、ぐがあああああああ！！！」

ランサーの断末魔であつた。

「くははははははは！！！！ウェイバー君、君のサーヴァント・・・
我らが貰い受けよう、感謝するよ、君の間抜けっぷりには。」

俺は、ケイネスの嘲笑を聞き流しながら逃げるのだった。

強奪（後書き）

はい、まさかのウェイバー君脱落・主人公家を得るの巻きです。

ランサーは不幸属性無いとね・・・で感じでNTRやってみました。
これは前々からやる予定だったので反対は認めない！

あと、デймさんって双剣双槍の使い手、アーサー王は槍の使い手
と聞いて誰か、セイバーなデймさん・ランサーなアルトリアな聖
杯戦争を知りませんか？？

と、言うわけでまた次回会いましょう。

戦後（前書き）

次回、日常編。

戦後

・・・深夜、とぼとぼ歩く三人組。

一人は腹に血の跡があるも、左手の無い少年を慰める殺人鬼

もう一人は周りを気にしながら護衛を兼ねている聖女

そして、左手が無く唯泣きじゃくるしか残っていない魔術師

龍之介とキャスター、先ほど戦争から脱落したランサーの元マスター
ー・ウェイバーであった。

「おいおい、そろそろ泣き止めよ。しょうがねえだろ？お前が悪い
のだからよ。」

「そうですね、『人の振り見て我が身を直せ』という言葉があります。
マスターの件があったのに呑気に観戦していたあなたが悪いで
しょう。」

・・・と、いうか。

「お、おまえらあゝ・・・ぐじゅ、慰める気ねえーだろ・・・うぐ。」

「「ああ、まったく無い」」

結構追い込んでいた。

暫くするとウェイバーは泣き止むと二人に謝罪、そして。

「んで、なんで僕を助けたんだ。ほっとけば良いじゃないか。」

と追求してきた。

当然である、戦争中なのだ。余計な荷物にしかない自分を助けた理由が見当たらないからだ。

「そこはほら・・・ギブアンドテイク、って奴だ。」

「・・・なら、僕から何を要求するんだ。」

自分を助けた代償が欲しいといってきた・・・まあ、助けてくれた事だし出来る事ならやってやろうと思うウェイバーであった。

なんだかんだで、やはり魔術師としては異端であり人として正常な男であった。

「ああ、それは

家が無いんだ、住まわせてくれ！」

「はぁ！！？」

こうしてキャスター陣は拠点を手にいれたのだった・・・そこを見張っている影の存在に気付かずに。

「以上が、キャスターのマスターに関する情報です。」

其処は、協会から冬木市の管理者・セカンドオーナーを任せられ、魔法使いである宝石翁の系譜を受け継ぐ由緒正しき魔術師遠坂の家系の現当主・遠坂時臣、アーチャーのマスターの工房である。

「そうか、解った。アサシンに見張りを続ける様に指示を」

「は、畏まりました。」

そういつて時臣の弟子、言峰綺礼との交信を切った。

この二人、実は師弟関係で繋がっており、その第一段階として言峰綺礼のサーヴァント、アサシンを時臣のアーチャーが討ち取ったように”見せかける”事にも成功したことで彼らの計画は順調と言える。

いまは、イレギュラーと思える龍之介について調べてもらったが・

「まさかあの聖女を召喚したのが殺人鬼とは・・・」

予想外も予想外である。

ジャンヌ・ダルク・・・下手すればアーサー王やイスカンダルよりも知名度の高い英霊である。そのような人物がまさか狂人に召喚されるとは。

「だが、今は監視に留めよう・・・問題はライダー・ランサー組か。」

移動手段のライダー、宝具を解放せずに最優のセイバーを圧倒したランサー・・・二人が組めば幾らアーチャーでも簡単に攻略できない。

「・・・あの性格だ、自滅を願う・・・か。」

こうして、遠坂の夜は更けていく。

ホテルの最上階、スイートルームを借りている男の名はケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

魔術の名門、アーチボルト家の当主であり、イギリスの魔術師の総本山、時計塔において若くして教鞭をとっている最も将来を嘱望されている魔術師だ。

そして、この聖杯戦争においてライダーのマスターでもある。

しかし、彼を知る者達が今のケイネスを見ればどういう感想を持つだろうか？

鋭角的に整った顔を怒りに歪め、青い瞳を血走らせ、いつもオールバックにしている髪は軽く乱れているため普段の彼からは想像も付かない激昂ぶりだ。

「今なんて言ったか・・・ええ、言ってみよライダー!!」

「言ったとも、かの義人として名高いランサーの介錯をワシがするといっているのだ。」

ライダー・イスカンドルは激怒していた。幾ら外道である魔術師でも矜持くらいはもっているだろうに、それを踏み躪るとは・・・

「まったく持つてなつとらん!!」

「黙れ、ライダー! 貴様のマスターは私だ・・・私の命令を聞けばいいのだ!!」

「何を抜かすか小童が!! ランサーのマスターであつた、坊主のほうはまだよかったわい!!」

「・・・奥方よ。」

「え、い、いいのよランサー・・・そ、そのなんかあった？」

新しくランサーのマスターになったソラウは戸惑っていた。

あの光景を毎夜毎夜やられればサーヴァントの扱いに神経質になっても可笑しくなかった。

「・・・まあよい、貴殿の将になったのだ。本分は果たそう・・・しかし

その令呪が無くなった時、貴殿の命日と心得よ。」

とランサーは霊体化したのだった。

ピンポイントの殺気を浴びたソラウは其の場で動かなくなり彼を奪ってしまった事に少なからず後悔をしたのだった。

戦後（後書き）

この後の爆破・・・どうなるかは次回、明らかに。

再会（前書き）

これのOP

大帝国のOPが『凜として咲く花の如く』・・・かな？あいそうなの。

再会

ソラウはケイネスに内緒で近場の大型デパートに向かって歩いていた。

理由・・・というかライダーとの喧嘩を一晚中されれば嫌でも居たく無くなるものだ。

序に自分のサーヴァントになったランサーの事も知らなければなら
ない・・・どうせランサー自身に聞いても答えてくれそうに無いし・
・

「はあ・・・ホント、男って・・・」

そういうと後ろを振り向く。

五人の人相の悪い男たち・・・ああ、なるほど

「馬鹿ね。」

そういうと周囲に迷惑の掛からないようにするため裏路地に入り追撃の用意をしていた。

「は・・・おいキャスター。・・・あれ、どうにかならないかな
？」

ウェイバーはマッケンジー家でのんびり過ごそうとしていた・・・

はずなのに

「ひやははははは！！すりすりすり潰して上げるぜ・・・大根ちゃん。」

「おやおや、巧いんだね。大根降ろし。」

「そうなんですよ！一人暮らしでなれたって言うか、やっぱり今の時代男は主夫になれないと彼女が出来ないと思うんですよ！！」

「はっはっはっは。御陰でこんな美人さんを貰えたって訳かい。羨ましいものだね。」

「おや、お前さん。私じゃ不満かい？」

「とんでもない、私に過ぎたるものじゃよ。」

「奥さん！そんな痴話喧嘩してないで・・・そろそろ火加減火加減。」

「おや、そうだね・・・有り難うリュウちゃん！もう少しで焦げてしまう所だったわ。」

「いえいえ！！それより早く飯にしましょうや。」

「・・・なんであんなにフレンドリーなんだ？！」

ウェイバーは頭を抱えていた。

声でわかるように朝からものすごい会話をしている龍之介。ここでは僕の友達として遊びに来た兼腕を折った所を助けてくれた人という設定である。因みに左手は骨折したかのようにギブスをはめてまですで隠している。暗示とはいえどもあんまり見せたくは無いものである。

因みにキャスターは、マリアンヌ・K・ダルクと名乗っており設定として龍之介の許嫁と自称している。

「・・・やつと私にも春が・・・うへへへへ、じゅる。」

それで良いのか聖処女！！

それから昼食を終えてこの後何やるかを検討中していたら・・・龍之介曰く、

「『木を隠すなら森、人を隠すは人込』ってな」

「と、いう訳でデパート行くぞ！！」「おお、これが騎士達の言っていた逢引って奴なのですね。は、励まなければ！」

（・・・なにに励むんだよキャスター。）
と心で言ってもこいつもどこか馬耳東風・・・というか猪突猛進なところがある。

思いだつたら吉日という奴だろうか。

そこでふと裏路地に微弱な魔力が漂っていた・・・裏路地だな。

取り合えず龍之介たちは気にせずデパートの方に向かっていった・・・
いいのかキャスター？

・・・と、取り合えず入ってみよう。

「っち、上玉だけに手間取ったな。」

・・・く！へましたわね・・・というか、ランサー！今こそ主人の
ピンチでしょう！助けなさいよ！！

「けはは、ここは俺らの縄張り・・・簡単に見つかんねえよ。」

くそ、くそくそ！ケイネスの馬鹿！！こういうお姫様を助けるのが
男でしょ！！

「さて、そんじゃ・・・げは！」

私の服に手を掛けようとした男が倒れた・・・

なんで・・・

何であなたが・・・

私は彼方からすべてを奪った悪女なのに・・・

「そ、その人を放しやがれ三下あ!!」

其処には右手にパイプ管を持ったウェイバーがいたのだった。

「その頃ケイネスさん家」

「だからライダー。君は黙って私に従えばいいのだ・・・ナイトE
5。」

「貴様こそ我が戦いぶりを後ろで眺めるといい・・・ポーンF3」

「・・・何時まで続く、彼女も彼女で何処に行った。（ふむ、矢張り無理矢理再契約したが為か念話が通じない。）」

と、ケイネスたちの御守に着かされたランサーであった。その後、彼女の危機を感じたのはそれから二時間後であった。

再会（後書き）

次回・・・一週間位投稿できないかも・・・それでも応援お願いします。

甘味（前書き）

少し少なめ。

いや、マジで仕事が大変！！

甘味

「おおお・・・こ、これが噂のクレーンゲーム・・・あ、この人形可愛いですね！ある・・・龍之介。これ取れますか？！」

「えーと・・・千円以内で取れるな・・・待ってるキャスター！」

「はい！」

拝啓、皆さま。自分初めて女性と遊んでいます・・・なんかいいものですね。周りからの妬み光線すらも気に成らない・・・ピバ龍之介！！やっぱイカレてるけど顔は良いもの・・・前の俺なんて・・・思いだしたくもないなあ。

「おっし、取れたぜキャスター！」

「おおおおお！！このモフモフ感・・・良い！！」

・・・羊が好きなんだね、ジャンヌ・ダルクは。ていうかそれとも俺に狼に成れって言うサインなのかな？？いや、深追いは止そう。逆に龍と成って食われる、物理的に・・・

まあ、さて置き本題に入ろう・・・

問）もしも友達が迷子に成ったから捜して見つけた時・・・

「・・・それでランサーは下からは慕われているけど上に対しては反発していたらしいから、上から目線の命令は絶対あり得ないと思っ
てね。」

「成るほど・・・ありがと、ウェイバー・・・あ、確かこのあたりに
おいしいスイーツのお店が有るんだけど・・・一緒に行かない？
(なんでもカップルで行くと割引があるらしい・・・っは！で、
でも私にはケイネスが・・・でも、こっちの方が将来性も・・・で
もあつちは名門だし・・・うゝむ。)」

女と遊んでいたら・・・

「へえー・・・そうだな、御腹空いたし・・・それにしてもリュウ
ノスケは何所「ほちゃー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
」ぐはー！」
「うえー！！ウェイバーー！！」

A、全 力！ドロップキック！！

「げ、ごほごっほ・・・な、なにすんだよ！って、リュウノスケ！
！」

「なにすんだあゝあ？？人が探してりゃ女の子見つけてきやつきや
ウフフ・・・爆発しろやー！！」

「「「「「おめーもだよりア充ー！！」「」「」「」

・・・あれ、なんか周りの皆から激しい突っ込みが・・・

ん？隣の美人さん・・・ありやあゝ

「リュウノスケ!!・・・つく、敵襲か!ランサーめ何所に!!」

おお、ランサーの新マスターさんだ・・・なんでウェイバーと・・・よし!

「双方までいい!!・・・なんてね。」

「・・・マスター遊んでる場合ではありません。」

・・・すいません。

「ランサーはセイバーすら圧倒したサーヴァント。此方の勝ち目は雀の涙ほどです。ここは撤退の指示を。」

「其の前にさ・・・ランサー居んの?」

「え、い、今連れていないわ。ケイネスの守りについてるし。」

・・・いや嬢さん・・・

「質問したのは良いが・・・普通応えるか?」

「・・・あ。」

「あっはっはっはははは!!ヤベ、これがドジッ子萌って奴か!!あっひゃっひゃっひゃ・・・」

(ゾクツ)

ひゅい!？」

サブー! な、なんだ。隣が寒いな??? ってキャスターさん? 何故武装して剣を此方に??

「リュウノスケ、アトデ、オハナシ、シマシヨウカ?」

「サーイエツサー!」

「サテ、キサマ・・・マスターヲタブラカシタツミハ、オモイゾ・・・カクゴシロ・・・」

ひいひいひいひい、え、閻魔様よりも怖いかも。

「と、取敢えずキャスター近くの・・・あの甘味処に行こう! ほら、ウェイバー! しっかりそちらさんもエスコートしろよな!」

「わ、分かったよ。ソラウさんも・・・」
「まって、ウェイバー。」
「ん? 何?」

「え、えつとね・・・呼び捨てでいいわよ、私の事・・・」

これが後のロード・エルメロイ二世夫婦の成れ染めであった。

>????<

「――、私です。・・・はい。キャスター及び、キャスターのマスター、ランサーの新旧マスターを見つけました。場所は冬木デパートの甘味処にて歓談中かと。・・・はい、しばらく監視します。では――。・・・まさか私の楽しみを奪うとは・・・キャスターのマスター・・・龍之介と名乗っていましたね。覚悟しろ。」

そう吐き捨てて、残りの今期限定ケーキを食しながらと周りの空気に溶け込み、監視を続けるのです。

甘味（後書き）

・・・最後分かりますよね？取敢えず零戦さんの影響で大帝国に
嵌り中・・・やべ、三国同盟蹴っちゃったらアドルフ死んじゃった
！！・・・取敢えず脳内嫁候補であるユリウス確保の為エイリスと
戦争中。

また次回。

同盟（前書き）

ジャンヌがいるから面白い・・・内容じゃなくてジャンヌという一人の御陰でこの小説が成り立っている、ような意見が増えてきた。

頑張つて、その評価を改めさせるほどの評価を受けたいなと思っています。応援よろしくお願いします。

同盟

「うまうま・・・おいウェイバー、そんな顔で見んじゃねーよ。やらねーぞ。」

「いるかよ！バカヤロウ！！なんでこうなったんだ！」

「知らん・・・今は、」

二人は舌戦をやめ二人の女性をみる・・・うん、おとなしくケーキ食ってるけど・・・

「何なんだよ?!このピリピリ感は!」

「しらねーよ・・・あれだ、女性だから体のことでも考えてんだろ。おら、お前も食えよケーキ。」

そう言つて龍之介は、レアチーズケーキを食す。

「やっべ、人生の中で一ヶ台の美味さだ!もう一つ注文しよつと。」

「はあ・・・誰か助けて・・・」

哀れウェイバー・・・原作よりも胃の強度は脆いが故にただため息を吐くしかなかった・・・

因みに女性二人は気が立っているのではなく、店の定員にそれぞれソラウがウェイバーの・キャスターが龍之介の恋人と間違われたのが嬉しく、ドキドキしながらそれぞれが隣でケーキを食しているのであつた。

龍之介は少し大人しくなつたキャスターを見て取り合えずソラウに話しかけた。

「さうで、と。取り合えず自己紹介！俺は雨生龍之介、好きな言葉は漁夫の利・・・お姉さんは？」

「私はソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ・・・一応、ランサーのマスターよ。」

双方は取り合えず自己紹介をした。否、ソラウは拒否できない。ここにランサーはいない、令呪で呼べば真っ先に自分を殺すであろう・・・ここは、キャスターのマスターに従うほか生きるすべは無かつた。

「そう・・・なぜここで会えたかは分らない、が。ここにキャスターがいる・・・其処でだランサーのマスター。」

「な、なによ？」

なぜか元からであつた細目をより細くし、此方を窺ってくる・・・ランサーをウェイバーに返せ？

・・・喜んで返したい。

此れは本音。

自分を殺そうとしているサーヴァントなんて百害あって一文の徳にもならないからだ。

「実はな・・・同盟を結びたい。」

「はあ!!」

訳が分らない!と顔でも出たのであろう。龍之介は自らのメリツトをいう。

曰く、ライダーとの決着が先約。他の連中がいては邪魔。

かの美髯公を敵に回したくない・・・何より。

「下手したら・・・協会からキャスター包囲網をされかねない。」

死にたくなかった。

「包囲網?なんだそりゃ?」

ウェイバーは龍之介の言葉に首を傾げた。なぜ、残りのサーヴァントがキャスターを包囲しなければならないのか、疑問に思った。

「それはですね・・・」

そう思っていると、黙っていたキャスターからとんでもない事が語られた。

「神の宣告です。」

「んなわけねーだろ!!」

と龍之介がキャスターに突っ込む・・・なんか言葉が出ない・・・

「いやな、実は・・・ニュース見ただろ。用水路から大量の身元不明者の子供の死体が出てきたってよ。」

「ああゝあつたな、そういえば・・・え？」

朝、ニュースを見てて物騒だなゝと思っていたが・・・まさか!

「お、お前がや、やったのか??」

「いや違う。」

さも平然に言った。嘘についてないからだ・・・そう。

「俺はやっていない。俺じゃない俺がやっただけのこと。」

今ここにいるのは龍之介・・・に憑依した男。決して彼がやったのではないからだ。

「彼方、二重人格？」

「似たようなものだと思っておいても構わない・・・まあ、狂気の龍之介はいない。いるのは陽狂の龍之介さね。」

にこやかに。どこか寂しく笑っていたのだった。

「・・・でも、龍之介がやったに違いは無い。故に・・・」

「そういうことだね」

と呑気に4つ目のレアチーズケーキを食い始めた・・・食いすぎだろ。

「それで、敵が多くない今のうちに味方をつて訳ね。でも、私も魔術師の端くれよ。」

ソラウは取り合えずこの提案に乗ろうと思った。断れば剣を突きつけるのは目に見えている。あとはいかにそれに見合ったものが手に入れば万々歳である。

「等価交換だろ・・・そうだな、バーサーカーとアーチャーの真名でどうよ。」

男は切り札を抜いた。

同時刻

デパートの駐車場。そこにイヤホンを耳にしながら寝ている男がいた。

ボサボサの髪に無精髭。まるで競馬か競艇かを聞いてるとしか見え

ない男がいた。

彼こそが主人公、衛宮切嗣である。

「……………舞弥、情報を聞き出したらデパートを出す。」

と、龍之介たちがいる甘味処で見張っている久宇舞弥に指示を出す。

「情報を聞き出したら連絡しろ。その五分後……………」

彼は、魔術師としては異端。正義の味方としても異端。究極のリアリスト。故に、

「デパートを破壊する。」

犠牲を払ってでも4人を殺す。それが彼の正義なのだから。

同盟（後書き）

切嗣や言峰の考えが自分自身では思いつかない・・・虚無玄さんまじで神だな。と思えてくる。因みに質問の多い、ライダー・ランサーの数値ですが・・・ライダーは魔力がウェイバーよりも高いが運が下がったと思ってください。ランサーは代わりません。あと、ライダーの魔力補給はランサー加入まではソラウがやっていたがランサー加入で元に戻したと思ってくれると嬉しいです。

逮捕（前書き）

な、なんと書けた・・・

逮捕

「アーチャーとバーサーカーの真名……ってわかったの?!」

うそ?! あんな出鱈目な宝具の量を持つアーチャーにそのアーチャーの猛攻を防いだバーサーカーの正体を見破ったっていうの? ?

「正確には断片的に拾えたってとこだな。キャスターのスキルの一つに“一見名当”で、いうのがあってな。ホントは一発で分るはずなんだけど……どうやらそういうのを防ぐ防具でも身につけているが原因みたいでヒントっぽいしか出なかったようなんだ。」

「……凄まじいスキルね。まあ、ライダーはそんなの気にしないらしいしランサーは見れば分っちゃうし……」

「……なるほど、ジャンヌ・ダルク故にか。偽装した勝利王を一発で見抜いた神告が宝具にならずとも強力なスキルとして現れたって所か。」

ウェイバーも納得してるし。……うう。も、もう少しそういうのを勉強したほうが良いかしら。

「でな、出て来た言葉が……キャスター、よろしく。」

「はい。アーチャーに関して出て来たのは。曰く、

・最古の英雄王

- ・ 友の死
- ・ 不老不死への旅

バーサーカーに関しては、

- ・ 湖の騎士

- ・ 無双の武

- ・ 王への反逆

と、啓示されました。」

「……だめだわ、後一步まで来てるけど名前が出てこない。アーチャーは無理だけどバーサーカーはセイバー（アーサー王）に斬りかかったのだからきつとアーサー王伝説に出てくる敵役よね。くー！こんな事分らないなんて知られたら……ケイネスはどうでも良いとしてウェイバーに呆れられるかしら……」

「うーん、バーサーカーは分ったけどアーチャーは……」

「うそん！バーサーカー分かったの？！アーチャーなら心当たりがあるんだが……」

「ええ？！二人とも分かるの？ たった此れだけで？？」

吃驚よ！……なんか、私って必要かしら……」

「だって湖の騎士で裏切り者。ましてやセイバーにイキナリ攻撃を仕掛けた所を見ると一人しか思い浮かばないぞ。」

「この前、コンビニで神話について載ってる面白そうな漫画があっ

だから読んで最初のページにあっただぜ。間違いない。」

「……ふん。日本のコンビ二って所は図書館かなんかな？今度入ってみよう。」

「バーサーカーの正体。円卓の騎士サー・ランスロット。」

「アーチャーはメソポタミアの英雄、ギルガメッシュ」

「って所……てか、ランスロットってマジで？バーサーカーって二流の英霊を呼んで強化するんだろ。どう見ても一流も一流。超が三ツ星付いても可笑しくないぞ。」

「強化じゃなくて狂化な。……でも、アーチャーのマスターは名門・遠坂。勝ち目無いぞ？魔術師として一級品として名高いからな。」

「……な、なんか絶望的ね。あははは……はあ。（ライダーは大丈夫としてケイネスは……ま、何とかなるわね）」

「所でさ、お姉さん。用件覚えてる??」

「ええ、覚えてるわよ。約束道理同盟を組むわ。すぐにランサーと話してみるし……ケイネスはどうにかするわ。」

取り合えず話し終わり、会計はケーキ7つ食った龍之介が払うことになった。

「よし、ホンじゃ帰りますかね・・・と其の前に。」

「んあ？どうした。」

そついうと一人、デザートを頼張っている女性の席に座った。

「と、失礼。お嬢さん・・・いや、セイバーのマスターの助手さん？」

「!?!」

「動くなよ?。」

女性が動こうとすると後ろにキャスターが立ち往生し、道を塞いでいた。

「取り合えず・・・さ。セイバーのマスターさん、聞こえたら其のまま聞いてね。・・・情報と人質を渡す。代わりに見逃してもらおうよ。」

そついうとキャスターは素早く彼女を拘束、そのまま彼女も会計を済ませて出るのであった。

「な、なあ龍之介・・・彼女は?。」

「ん？うん・・・保険。」

「へ？」

こうして、無事にデパートを出て人質を釈放し帰ろうかと言う所で・

「失礼。雨生龍之介だな。匿名の通報で、児童殺害及び用水路への死体遺棄の疑いがある。・・・署まで御同行を。」

国家権力に捕まりました・・・

ぎゃーーーーーーーー！！

逮捕（後書き）

・・・内だけかな？警察に捕まるマスター（笑

でも、連れて行かれるのは別の所です。次回ご期待。

1202 本文修正

聖域（前書き）

今回、甘いです。自分的に甘く書いて見ました。こんなん違つと書いても無意味です。

だって、こういう彼女が欲しいんだもん。こういう彼女が良いなと、妄想半分で書いたので反論は許しません。

さて行くぞ！男たちの聖域へ！
ラ・ユグナル

聖域

・・・ピチヨン・・・

・・・ピチヨン・・・

・ピチヨン・

「・・・ん？うん？・・・ここ、何処よ？」

皆様、お久しぶりの龍ちゃんですが・・・なんか見知らぬ穴倉の中にいます。

「うゝん？？キャスター、いるのかー??」

キャスターを呼んでみた・・・いないな・・・まったく。

でも、ホントにここは何処だ？

記憶では・・・

・警察に捕まる。

・駐車場に移動。

・・・主人公登場・同時に発砲・・・あ！！そうだ！！

「あの外道正義！警察官が気を失った瞬間、発砲しやがったんだ！・・・でもよく生きてるな、俺？？あれか？！奇跡聖女様の御加護様々ってやつか??」「いいえ、ちょうどナイフが仕舞ってある所に着

弾したんで痣みたいになっている程度です。これで殺傷力の高い奴でしたら命は無かったでしょう。」ん？キャスター！・・・どったの？」

なぜか暗い隅っこのほうから顔を暗くした聖女様一名。

「マスター。」

そっぴうと頭を下げ

「どうか、軍罰に則り処罰願いたい。」

・・・っへ？何故に？

「マスターが危険に陥ったというのに敵マスターおろか、その手下すら討てなかった自堕落。どうか、このキャスターを処罰願いたい。」

・・・なんだろうか。此れがエロゲの世界だったら早速プレイだが・・・
・・・どうも、気分になれない。

「つかさ、俺もあれ・・・油断していたって言うかさ・・・」其の上！」「ん？」

「其の上・・・案の定セイバーに追撃されましたが、憎きライダーに助けられたこの仕打ち・・・耐えられません!!」

・・・は。重症だな、こりゃ。

「だったらよう・・・在り来りの言葉だけどさ、『汚名返上・名誉挽回』をする気は無いのかい？」

「そのような事はありません！・・・唯、処罰無しが不服なのです。」

即答、そして駄々っ子・・・やれってか？まったく。

「それじゃーさ、一寸こっち来い。」

「・・・は。」

一息吐き此方に歩むキャスター。そして俺はキャスターを押し倒し・

「んぎゅーーーーー。」
抱き枕にしてみました。

「ふぁ、ま、マスター？」
抱きつかれて紅くしているキャスター。だつてよ。

「お前はジャンヌ・ダルク。そして同時に聖処女であり続けなきゃいけない。そんな中これ程までに異性に抱きつかれた事なんて無いだろ？」

「へぁ、はい。家族以外では。」

「んじゃ、俺様が最初に家族以外で出来たんだ。此れが俺流の処罰。んゝ抱き抱き。」

「ま、マスター／＼／（ぎゅ）」

お、抱き返された＼（＾０＾）／

「しかしキャスターよ・・・気になったところがあるんだが？」

これは絶対に聞きたい。いや、聞かなきゃ男じゃない。（キリ）

「はい、何でしょう？」

抱き着きながら上目使いで聞いてくるキャスター。やべ、レベル高いなこれ。

「どうしても聞きたかった・・・キャスター。（女としての）戦闘力は幾つなんだ？」

と、丁度見えている谷間付近の丘を突付いてみる・・・ここに男たちの聖域ラ・ビュセルがあつた。

「ふあ！？そ、そこは・・・その・・・うゝ・・・は、81です。」

と体を小さくさせて答える・・・ふが、忠誠心が溢れ出てくるな。

この光景。

『おお、なんとも妬ましいですぞ。リュウノスケ。』

・・・・旦那、すまねえ。でもいつか見せてやるよ。男たちの聖域を
ラ・ビュセル
！！

・・・・そういえば？

「なあ、キャスター此処何処よ。」

たつぷり堪能して起き上がり現状確認。キャスターも顔を紅くしながら起き上がる。

「ここは冬木中心に流れていた川の所にあつた貯水場です。」

・・・・ああ、やっぱりリュウノスケといえはここがお似合いか。

「そういえばキャスター、ライダーに会ったって言ったが・・・他になんかあつたか？」

そろそろ出しな、零運命の見せ場の一つ・聖杯問答。そして、俺の記憶の終点。此れ以降はマジで戦わないといけない。

「実は・・・セイバーの場で宴会をするとのことですよ。それで招待されましたが、如何なさいますか？」

ふふん、決まっている。

「行くぜ、勿論な。・・・そして見極めてみるキャスター。三人の王道を」

お前が戦うべき英雄の理想を

聖域（後書き）

・・・感想、指摘。待っております。ただ、砂糖時間については誤字脱字以外の指摘を受ける心算はナイト思う・

次回、皆お待ちかね聖杯問答。ここでランサー・キャスターの聖杯に願う事を書くつもりです。では、また。

戦人（前書き）

予告は嘘である！！

スイマセン、ライダーランサーサイドを書いていて問答までいけなかった・・・次回こそ頑張ろう。

戦人

「ええい、ライダー。もっと早く移動できぬのか!」

「そう焦らんでもいいだろうに・・・今、キャスターと共に居るのだ。何とかなるだろう・・・そう思うだろ?ランサーよ。」

「そうだな・・・盟を結んだ以上、イキナリは戦うまい。だが、ライダー。貴殿は良いのか?キャスターに真っ先に目を付けられているが?」

「なぐに。挑まれる以上、余も本気を出す所存よ。相手は救国の戦乙女。不足は有るまい・・・それに、奴には王とは何たるかを教えなければなるまい。」

男三人、内二人は大男ゆえに目立つ筈である・・・しかし、今居る所は空・雲に掠る掠らないくらいの所にいた。

時刻は夕暮れ時。ライダーとケイネスの勝負はライダーの勝利に終りランサーの念話がようやく作動したことにより、行動を起こしている。

・・・もつとも、ケイネスはソラウが心配なだけで急ぎソラウが居るデパートに移動しているのであった。

そこに、

「む。結界？」

人払いの結界。デパートの駐車場の所から発せられているのであった。

「ライダー、結界のところに向かう。ランサーはソラウの所に行ってくれ。」

「御意。」

ランサーはケイネスの言を聞きそのまま神威の車輪から飛び降り、デパートの屋上に着地しソラウを探しに行ったのであった・・・ヒビ入ったコンクリートを無視して。

存外早く見つかった。駐車場の近くであり、更に言えば自分の元マスターもいる。なんと幸運なと思い声を掛けようとして・・・素早く二人の傍に赴き、投げつけられたダークを叩き落したのであった。

「うわ！！ら、ランサー。」

「ランサー。来てくれたの？」

新旧ランサーのマスターに感謝されるも今はそれ所ではなかった。

「あ、アサシン・・・な、何で？」

「ど、どうしてアサシンが入るんだよ？」

漆黒に染められた異国の装束、そして白い骸骨の仮面の暗殺者アサシン。その数は……ひいふう……ふむ、ざっと6人か？

まあ、マスターは脱落したはずのサーヴァントに驚いているが、

「貴様ら……立ち去らねば、斬捨てるぞ。」

声を低く獣が唸り上げるように言い放つが……効果は低そうだな。

「ならば……我が青龍偃月刀の錆にしてくれる！」

青龍偃月刀を振り上げ更に魔力を帯びさせる……そして思いっきりアサシンに向かって空気を切る。

それが真空刃となり二人のアサシンを切り裂いた。

ランサーの反対側に回り込んだもう一人のアサシンは隙を付きダークを投げるもランサーは即座にダークを掴み、別のアサシンに向かって投げ絶命させた。

二人のアサシンはランサーを挟み撃ちしようとするも、ランサーは背後のアサシンを青龍偃月刀の刃で首を落し正面のアサシンを片手で顔を掴み上げ、髑髏の仮面ごと握り潰したのであった。

最後の一人になったアサシンは敵わぬと見て撤退しようとして……投げられた青龍偃月刀に貫かれ塵と化したのであった。

二人の新旧マスターは哑然としていた、無理もない。たった一人でアサシン六人をあつと言う間に斬捨てたのだから。

「二人とも、大丈夫でしたかな。」

しかし、ランサーの声と共に現実へと帰ってきたのであった。

「む、こりゃあいかんぞ。」

ケイネスもその光景が見えていた。キャスターとセイバーが争っていた・・・否、キャスターはマスターを抱え撤退していてそれをセイバーは斬捨てようとしている。捨置けばキャスターは討たれるであろうが、そのような結末はこの男は望んで居るまい。まあ、チェス勝負で勝った際自分に戦いを任せておくと賭けられたのだ。自分の言葉がなくともこの男は勝手に動くだろう・・・しかし。

「ライダー、良いのか？」

この男は動かなかった・・・まるで・・・

「ケイネス、御主はどうする？」

自分を試しているようだ・・・ならば言う事は一つしかない。

「ふん、決まっている・・・ランサーの盟友はわが盟友。それを助けて何が悪い？」

不思議とこの言葉が出てきた。らしくない、自分でもそう思える。

ライダーのせいにしておこう。それが一番だ。

「ハッハッハッハッハッハッ！言うようになったではないか？ん、どの面で言っておる。今までが嘘のようだぞ。」

「放っておいてくれ。それより早くしないと倒させるぞ。ほら、剣戟に耐えられなくなってきたいる。」

「いかな。では行くぞ！A A A A A L a L a L a i e ! ! ! !」

まったくらしくない・・・だが、

「存外、悪くないものだ。」

戦人（後書き）

ケイネスを少しかっこよく書いてみたこうなった・・・悪くないな、意外と。

タクミンボイスで妄想・・・逝けるぜ。

では、応援よろしくお願いします。

問答（前書き）

オリジナルの願いでございます。

こんなん関さんの願いじゃねえ・ジャン又違うといったものはあま
り受け付けない・・・と思う。では、お楽しみください。

問答

「くが!!」

くそ。こいつ・・・セイバー!!

「其処までだ、キャスター。」

「こんの・・・邪魔するな!!」

片手で剣を振るうも、剣の英霊には届かない。そればかりかその隙を突いて攻めてくる。

「キャスターよ、往生際が悪いぞ。ましてや貴女は世が認める聖女。何故そのような殺人鬼をマスターと認めるか!!」

「勝手な事ばかり・・・人殺しに恋して何が悪いか、狂人を愛して何が悪いか!!彼が私のマスターに成ったのは偶然ではない。奇跡に等しい我が思いを神が叶えてくれた。やり直しの機会を神様が与えてくださった・・・その邪魔をするな!!」

剣に力をいれ踏み出す・・・しかし

剣は弾き飛ばされ壁に激突した。・・・ああ、マスターは無事です。ね。セイバーのマスターも流石にビルの上上階まではこれまい。

「では。」と静かに剣を構えるセイバー・・・に突進し、そのまま屋上から身投げし道連れにしようとして、

「こ、の！」

「かふつ。」

柄で体を吹き飛ばされて阻止されたのだった。

そして、吹き飛ばされた自分に馬乗りし

「つく、仕舞だ。」

セイバーは剣を落そうとしている。

「ああ・・・マスター。」

申し訳ありません・・・貴方を守れませんでし

「A A A A A L a L a L a i e ! ! ! !」

・・・なぜこの声が聞こえる？

咄嗟にセイバーが私から退いたので私は反対のほうに逃げ延び、

「おう、無事であったか。キャスター。」

肉だるまの王様に声を掛けられた・・・あれか、コイツに助けられたのか。

「……く、屈辱！」

「おいおい、助けたのだ。もう少し喜んだらどうだ？」

「助けるなら白馬で来い。……ではなくあそこから大逆転する所だったのだ。余計な真似を！！」

「ふふん。剣を弾かれ、突進むなく敗れようとしていたのだ。説得力は無いぞ？」

く、くそ！ええい！！

「……ふん、手間をかけたな。」

「ふははははは！盟友の盟友は我が盟友。ランサーの同盟者なら我が同盟者でもある。」

「さて、私はランサーとは組んだが貴様を倒す為に組んだのであって、貴様の『皆で一緒に征服戦記』の仲間になった覚えは無い！」

「まあまあ、良いではないか。おお、そうだそうだ。実は、先ほどアーチャーを見かけて思ったのだ。この戦争には三人の王が揃っている。其処でだ、ここは一つ英雄としての”格”を比べてみるのは面白かるう？」

……つまりは

「一時休戦し、互いに聖杯に祈る望みを教え合おうと言うのか・・・
下らん、だが賛成でもある。今のままではマスターが危ないしな。」

「では、キャスター貴様は来るか？」

「恐らくマスターは行くだろうから行かせてもらう。そして聞かせてもらおう・・・貴様の言う王道という愚をな。取り合えずマスターが起き次第だ、では。」

「おう。・・・で？セイバー。お主は如何する？」

「・・・いいだろう。私も王だ。受けてたつ！」

そして、ライダーセイバーと別れた私は近くにあつた用水路に赴きマスターが起き上がるのを待った・・・途中で脱落したはずのアサシンと交戦したかな。

そして、赴いてみると・・・なぜかセイバーがライダーに怒鳴られているな？何をほざいたのだ、騎士王。

前置き長くおひさしな龍ちゃんです。

いやゝ来たよ聖杯問答・・・あと王の軍勢。ここまで見たらもう御腹いっぱいな感じだぜ。

取り合えず参加者。

アイリスフィール・セイバー、ウェイバー・ソラウ・ランサー、ケインス・ライダー、俺・キャスター、そんでアーチャーと大団団・・
・たぶんここ以外にも大人数な所がありそうだな。

それはさて置き、今の所ライダーに叱られ途中のセイバーさん。やはり救済を願っちゃった、みたいな感じ。

まあ、アーチャーは法を貫くと言うと。

ライダーは受肉し征服を行うと。

．．．一般ピープルな俺じゃわからないよ。

「取り合えず、その辺にしときなよライダー。折角の宴が台無しだよ．．．第一俺まだ飲んでないし。」

「其処ですか普通？」

と突っ込むキャスター。だってよ．．．

「王の道は王にしか理解できない．．．故に王とは人であって人にあらず、って誰かいていたような気がする？」

「．．．はあゝ。」

突っ込もうよ、キャスター。

「っむ？おう！キャスター、遅かったではないか。」

「やかましい、喋るな。」

見事は返し・・・うう、龍ちゃんも少し喋って欲しいと愚考するよキャスター。

「んで、何でセイバーが縮こまっている？どうせ問答で敗れて恥ずかしいならとつとと自害して果てる。」

「神の犬が・・・喚くとその口を縫うぞ？」

そしてアーチャー怒る・・・取り合えず、キャスター座ろうか。

そして、俺たち参戦・・・まあ、問い掛けは最後のほうらしい。

「まったくセイバーは・・・ランサーお主は何を願ってこの戦争に参加したのだ？」

この問い掛けにみな、ランサーのほうに顔を傾ける・・・セイバーは未だに俯き葛藤しているっぽい。

「・・・某の願いか・・・我が武、何処まで貫けるか試してみたいと思ったの・・・父親をやリたかったからかな。」

ん？どういふこと？

「元マスター・・・ウェイバーを見たときに、息子関平を思い出してな。思えば父親やしいことを出来ず、もっぱら武人としての心構えしか教えていなかったと思う・・・折角の蘇りの機会だ。今世の息子を一人前にさせてやりたいなと感じた。」

とランサーは言葉を終わるとウェイバーの頭をグリグリと撫で回すのであった。・・・まるで親子だなと感じえた。

てか、

（これもセイバーに直撃じゃね？アーサー王は息子を殺してるし。）

一応見てみる・・・うん、なんか存在が薄くなってきた。

「故に例え今マスターが違えども今世の息子の為にも負けられん。布告しよう、我が武に平伏すといい。」と鷹の目の如く鋭い睨みが場を圧倒する・・・やべ漏らしそう。

「ふはははははは！！良いぞランサー、その布告しっかりと受け取ろう。」

「成り上がりが・・・身の程を知るが良い。」

・・・流石王様。物ともしていない。

さてこの順だと、俺たちかな？

「では聖女よ、お前の望みは何だ？」

仕切るライダー・・・やっぱりこういうのはライダーが一番あって

いるな。

「少しセイバーに似ているが・・・我が願い、とある男の運命を変える事だ。その男の運命が変わるなら我が命・・・惜しくもない。」

こうして、第二次氷河期がやってまいりました。

問答（後書き）

感想・指摘・応援

よろしくお願いします。

とある少女の昔話（前書き）

聖女の願い、その原点。

とある少女の昔話

何時からでしょうか・・・彼のことを気に成り始めたのは。

『おや？聖女、目覚めたばかりですか？いけませんね、寝癖が着いています。ささ、身だしなみを整えて。』

『しかし、これから戦場に行くのだ。兜で隠れるから大丈夫では？』

『それでもです。常に身も心も清くなくてはいけません。一つの汚点ですべてが終わる事など少なくありません。さ、鏡を持ちますので手早く直しましょう。』

『さて、それくらいは侍女にやらせろ。貴公は貴族なのだぞ。』

『貴女の前に貴族も関係ありません。それに私がやりたいのでやるだけです。』

『・・・スイマセン。』

『いえいえ。』

あなたはいつも私を気にしてくれて・・・支えてくれた。

『お・・・おおお・・・大丈夫ですか聖女！！』

『ウルセエよ！！静かにしやがれギョ口目！！』

『何ですかその渾名！！それよりも聖女大丈夫ですか！敵に斬られたと聞いて副官に場を任せ飛んでまいりました。』

『今にも目が飛びでそうだぞ、おい。』

『ふふ、大丈夫ですよ。イルもからかわないでください。』

『へいへい。そんじゃ邪魔になりそうだから外に出ますよ・・・いちやつくなら声出さないでくださいね。』

『こ、こらイル！！・・・もう。それはそうとジル。私はもう大丈夫ですから場に戻ってください。もう少ししたらリッシュモン卿が援軍に来るはずですよ。』

『そうですね。では、聖女。どうか無理せずに・・・』

『大丈夫です。この身は国の為、我が神の為・・・そして、ジル。貴方の為にも。』

だからこそ・・・だからこそ！！

『ぐへ・・・へへ、失敗しちゃったよ。すまねえ、聖女様。』

『イル！・・・貴方、私を・・・どうして。』

『決まってるだろ！俺たちの救世主を、聖女様を、大将を救いに来たんだよ！！』

『・・・イル、ですが私は・・・明日にはもう』

『関係あるか！救いていから救うんだ！リッシュモンの旦那も王に掛け合ってるし、ジルもまだ捕まっていな！まだ、何とか成る！』

『・・・』

たくさんの民衆いる広場中央に私は火刑台にかけられていた。

「殺せええええ」 「魔女だああああ」

罵声が私に飛び交う。

『神様・・・神さま・・・かみさま・・・』

神様に祈る・・・祈る・・・いのる。

死にたくない・・・まだ死にたくない。

神様・・・私を助けて・・・

『ジャンヌ——ッ！！』

・・・あ、この声・・・

「ジャンヌ!!!!!!!!・・・私は信じております!!!!」

・・・あはは、やっと名前で呼んでくれた。

でも、衛兵来ちゃうよ・・・早く逃げないと、捕まっちゃうよ・・・

「誰があなたのこと魔女と言おうが 罵ろうが 私は貴女が正しいことをツ・・・・・・信じております!!!!!! 貴女が信じたもの、成し遂げたもの、その全てを信じております!!!!!!」

ありがとう・・・・ジル・・・・私・・・・今、少しだけ・・・・嬉しいな。

ねえ、ジル・・・・来世で貴方の妻になれないかな？

成れたら・・・・幸せな家庭を作りたいな・・・

『・・・・神様、あなたに全てを委ねます。』

だからどうか・・・・皆に・・・・ジル・ド・レイに神の導きが有らん事を・・・・

だからこそ！私は願う！！

「我が望み・・・それはある人の運命を変えること。」

そう・・・今度は私が救う。貴方を、ジル・ド・レイを！！

とある少女の昔話（後書き）

・・・うん！こんどは大丈夫だろう。

我が傑作！！

次回は・・・結構間が開きます。

王道（前書き）

謝る事が一つ

どうしてもライダーとキャスターの問答が書けなかった。

故に、そこら辺は自己解釈でお願いしたい。

王道

「・・・あゝ。この戦争始まって以来耳の掃除を怠っていたとはいえ、またしても運命を変えろという願いが聞こえるとは・・・。御主の願いはそれほどのものか？キャスターよ。」

「そうだな。まあ、お前たちがどう思おうとこの願いは我が命を懸けるに相応しきもの。故に、騎士王のように説いても無駄だ。」

「・・・・・・・・」

征服王は頭を抱えながら聖女に再び問うも、聖女は鋼の意思を貫く。黄金の王と騎士の王は黙り込む。

その様子にランサー・関羽は黙りながらも行く末を案じながら

「キャスターめ、思わぬ奇襲を駆けるとは・・・しかし、かの聖女に思われる者はさぞ幸せ者だろうな。」
「と思い振っていた。」

だが、ランサーどころか恐らくキャスターのマスター龍之介すらも分らない。ジャンヌ・ダルクの思い人が青髭と呼ばれる殺人鬼、ジル・ド・レイ伯とは誰も思っていない。

「しかし・・・こうもそれぞれが似ているな。我が王と、その好敵手たちに。」

「おお、ランサー的王様評価？俺、三国志とか結構読んでたけどさ、

実際あの3人の王様。誰をどう例えるよ？」と龍之介は話しかけてきた。

この男にはマスターとしての自覚は無いのかと疑いたくなるケイネスにそんな龍之介を見て胃の痛みが再発しそうになっているウェイバー。そんなウェイバーを心配するソラウの姿が近く似合ったが龍之介の目に入っていなかったらしい。

「む？そうよな・・・先ずアーチャーは魏王・曹孟徳、これは間違いないな。あの気高い心、絶対なる自信、そして法にて国を治めるやり方。まさしくあの男そのものだ。しかし、曹公と違うのは人を見下し過ぎる所だな。曹公は残虐な男であつたが同時に人と才能を愛している男だ。アーチャーとは其処のみ天地の差だな。」

「ふん。」

曹操 孟徳

中国後漢末の武將、政治家。詩人、兵法家としても業績を残した後漢の丞相・魏王で、三国時代の魏の基礎を作った英雄。皇帝である献帝を蔑ろにし権力を握っていた事、徐州に於ける虐殺、孔子の子孫の孔融を一族もろとも処刑した事、名医と言われた華佗の殺害など、儒教思想的に非難されるべき行為が見られる為時代が下るにつれ苛烈な処置ばかりが強調され、様々な業績は陰に隠れていくこととなるが近代では評価を見直しされている。業績としては、家柄や品行によらず、才能ある人材を積極的に登用することを求めた『求賢令』、戦乱のために耕すものがいなくなった農地を官の兵士が農民を護衛して耕させる制度である『屯田制』などを挙げられる。また、三国時代で既に中華大陸の3分の2を集渥しており将としての器は計り知れない。文武両面に非凡な才能を見せた曹操を陳寿は「非常の人、超世の傑」（類稀なる才の持ち主であり、時代を超えた

英雄である」と評している。

つまり、関羽は其処までアーチャーを認めている・・・否、最大の敵としてみている証拠なのだろう。

「そんじゃライダーは？あの懐の高さで見たらやつぱり劉備かね？」

と問いかけるがランサーは首を横に振る。

「玄德兄者はどっちかというとセイバーだな。なの理想高き志、そして脆い心。玄德兄者そのものだ。ライダーはどっちかという和小霸王孫策だろうな。噂でしか聞いたことないが東方遠征の躍進ぶりを見るとそう言わざるを得ないな。」

劉備 玄德

黄巾の乱の鎮圧で功績を挙げ、その後は各地を転戦した。諸葛亮の天下三分の計に基づいて益州の地を得て勢力を築き、後漢の滅亡を受けて皇帝に即位して、蜀漢を建国した英雄。人を惹き付ける魅力となるのが、儒教の理想とする君子的高潔さであり、これによって奸雄・曹操と対立軸を構成している。国のその後を天才軍師であり三顧の礼により向かい入れた諸葛亮に全て託すのに際して、何らの疑念を抱かなかったことは、君臣の公正無私な関係を現すものとして、永遠に手本とすべきとされた。但し、彼を抱えた群雄達は悉く滅びの道を歩んだ為、一部ではイナゴ・疫病神扱いされている。また、漢王朝の一員でありながら、その漢王朝を救う事が出来なかった苦悩があらゆる作品で覗かせている。

孫策 伯符

呉郡の將軍である孫堅の長子。弟の孫權は呉の初代皇帝となった。19歳のとき、袁術軍に組み込まれていた亡き父孫堅の兵1000人余りをまとめて軍を成し、江東の劉？を倒して勢力を拡大。その後、袁術の元から独立し大きく躍進する。そのめざましさから「小霸王」と称される。しかし、その電撃的な躍進が各地に反乱分子を抱えることになり元は呉郡太守であつた許貢の残党によつて26の若さでこの世を去つた。

セイバーは正に王の理想を体現させようとしてもう少しのところで全てを失つた人。

ライダーは36とはいえ夢の途中で若死する。

なんとも微妙にあつていたのであつた。

「ライダーは後継者が孫權並みそれ以上の実力者がいなかったが故に国が分断した。セイバーは理想という夢を追い続けたが遂に届かず散つていった。儚くも英雄はどれも此れも似たようなものだな。」

「・・・」

三国時代、三人の王に認められた関羽が故の発言はでかいなと龍之介は心のどこかで思った。

そこに・・・

「神の犬が・・・存在すら目障りだというのに下らぬ望みを我が室に願うというのか。いい加減我の寛容さも限界だぞ。ましてや道化なセイバーに似たる顔が鬱陶しい。我が醜く整形させてくれよう。」

面を差し出せ。」

「傲慢な男だな。故に友を無くしたというのに懲りていない。さぞ、唯一の友が草葉の陰で泣いておろうな。」

「犬が我が真名を・・・いいだろう・・・刑を執行する。其処に直れ駄犬があ！」

「おいおい、アーチャー落ち着かんか！キャスターも喧嘩を買っ出ない。」

なぜかキャスターとアーチャーが嫌悪な雰囲気を出し戦争一步前まで来ていた。

矢張り、英雄王ギルガメッシュ。神嫌いな彼の前に神を信仰するジャンヌ・ダルクは存在自体鬱陶しいようだ。また、ジャンヌ・ダルクも生前見捨てられた故に王嫌い成った為、王と言いつけるギルガメッシュに嫌悪感を隠そうとしなかったらしく、只今の様態に成ったという。

そこに

「う、うわ!!」

ウェイバーが声を上げた。

それもそのはず。その姿は暗闇であれば見れないような黒であり、一点だけ反対色の白であるが、そこは髑髏の仮面であった。つまり、最初に退場したとほとんどの者が思われたアサシンである。しかも、

その数が尋常ではなかった。周りを囲むようにアサシンの数は50以上は間違いなくおり、その姿は子供のように小さな者もいれば、女のような丸みを帯びた輪郭の者もいて、全てが別の個人のように見えた。

龍之介は歓喜した。遂に見れる。自分の持つZEROに於ける最後の記憶、そして誰しもが圧巻した風景を。

「む……無茶苦茶だッ！」

1つのクラスにつきサーヴァントは1体と決まっている。その考えなら、1体以外はアサシンに扮した偽物になるが、同じサーヴァントは全員がサーヴァントであると感じ取った。アサシンが増殖しているのは怪異や異常でしかない。

「どういうことだよ！？何でアサシンばかり、次から次へと……だいたい、どんなサーヴァントでも1つのクラスに1体ぶんしか枠はないはずだろ！？」

狼狽するウェイバーを見て、アサシン達は笑う。

「——左様。我らは群にして個のサーヴァント。されど個にして群の影」

今回呼び出されたアサシンのサーヴァント。『百の貌のハサン』の秘奥だった。このハサンは歴代の教主たちと違い、肉体改造の類を一切行わなかった。その必要がなかったと言ってもいい。何故ならば彼の肉体は一つでありながら、その身体には数多の別人格が宿っていたからだ。生前は肉体という一つの枷に囚われていた無数の魂

は、サーヴァントという霊体存在になることで、こうして分裂した形で現界することを可能とした。無論、ただでさえ直接戦闘の苦手なアサシンの魂を複数に分散させる以上、個々の戦闘能力は他のサーヴァントとは比べ物にならないほど低くなる。が、それはあくまでサーヴァントと比較しての話だ。

それを見て表情を硬くするのはウェイバーとソラウ、アイリスフィール、そしてセイバー。忌々しげに見るのはアーチャーとキャスター、ランサー、ケイネスで、変わらず酒を飲んでいるのはライダー、なぜかワクワクと周りを見渡す龍之介だった。

「ライダー？ お前にはアレが見えないのか？」

周りを見ながら静かにケイネスはライダーに問うとライダーは笑いながら柄杓で酒を掬う。

「そう喚くなケイネス。客への対応も王としての器が問われるのだぞ？」

その言葉にこの場に入る者は耳を疑った。包囲し敵意を露わにしているアサシンを客と呼ぶとは……

そして酒の入った柄杓を高く上げ問いた。

「さあ、我らと語ろうとするものはこの杯をとるがいい。この酒は貴様らの血と共にある」

返答は短刀の投擲。黒装束の集団の一人から投げられた一閃がワインが汲まれた柄杓を破壊し赤い液体がライダーの肩に掛かった。

「そう・・・か。それが望みか。余はこの酒は貴様らの血と共にあるといったはず。地べたにブチ散らされたいと申すのならば仕方あるまい」

旋風が吹き込む。熱を孕んだ耳元に唸る風。

「セイバー・アーチャーよ。今宵の宴の締め問いだ——王とは孤高なるやいなや？」

アーチャーは問われるまでもないと失笑し、セイバーも躊躇わず答える。

「王たらんとするのなら・・・孤高となるしか・・・ない!!」

両者の返答にライダーは高らかに豪笑した。それに応じて辺りを包む風も一層激しさを増していく。

「ダメだな！ まったくもって何も解っておらん！ そんな貴様らには、やはり余がここで、真の王たる姿を見せつけてやらねばなるまいて」

遂に最高潮と達した暴風が現実を侵食する。

晴れ渡る蒼穹が照りつける太陽が、ここにいる者たちの影を地面に焼き付けようとするかのように輝いている。

先ほど吹いた風は、この大地を駆け抜ける風だったようだ。

「こ、固有結界だと？ライダーが？貴様こんな事が出来たのか！？」
「どうだ！ケイネス！驚くのも無理はない！！」

ガハハと大笑いするライダー・・・どうやら自慢の奥の手を披露してご満悦のようだ。

確かにこれは誇るだけの物がある。

更に、固有結界の能力なのか、取り込まれたアサシン以外の者たちはライダーの近くにいた。

そしてアサシン達は包囲が解除され真正面から対峙している。

しかも、アサシン達とは100メートル程に離れている。

この光景に、龍之介は子供のようにはしゃいでいた。

「おお、ライダーすげーじゃん！！こんな事出来なんて超超超c o o 1だぜ？それで、次は何が起きるんだ！？これだけでおしまいって事は無いよな、な！！」

「無論だぞ。キャスターのマスターよ？そしてキャスターよく見ておけ。此れが余の王道である。」

ライダーの言葉と共に、ライダーの立っている後方から蜃気楼が立ち上った。

陽炎のような揺らめきが徐々に厚みを持ち・・・色を持ち・・・人の姿を取って行く。

「これは余だけで出来ることではない。これはかつて余が駆け抜けた大地、苦楽を共にした勇者達が、等しく心に焼き付けた景色よ！

！」

・・・気が付けば、ライダーの背後には様々な国、様々な人種で構成された重装歩兵の軍団が現れた。

「彼ら・・・一騎一騎がサーヴァントだなんて・・・」

マスターとしての能力で見抜いたのだろう。

ソラウが啞然と呟くばかり。

そこに集う者達は唯進む方向を見定め、王の号令を待ち望んでいる。

ただ一言。

征服王イスカンダルの唯の一言を待っている。

号令一声で邪魔する者は征服し、蹂躪するのみの軍勢が待ち望んでいた。

「魔術師でもない者が・・・固有結界だと・・・そんなわけ・・・」

よほど信じられないのか、ケイネスはさっきから同じことを何度も繰り返していた。

其処にライダーはケイネスの頭に手を置き落ち着かせたのだった。

「勿論、余は魔術師ではない！　だが見よ！　この勇志達は余と共に肩を並べながらも対等に戦ってきた者なのだ！」

其処に一頭の馬が進み出る。

「おお！ 久しいな相棒！」

この馬こそは征服王イスカンドルの足として駆けた名馬、ブケファラス。

関羽が見た馬の中でも最高の名馬だと言う事は言うまでもない。

「・・・赤兎と競える馬がこのようなところで出会えるとは・・・」
自らの愛馬にして名馬赤兎と比較しても見事といわんばかり名馬であつた。

その名馬にライダーが乗り込み宣告する。

「肉体が滅び、その魂が“世界”に召し抱えられ、時という覆せぬ条理が立ちはだかるうとも余に忠義し、こうして永遠を誓つた朋友達は駆けつけるのだ！その友達全てが心に刻んだ心象だからこそ、この世界を現わせる！これこそ征服王イスカンドルの最強にして、無類の宝具『王の軍勢』！守るのではなく、守り合う信頼の絆を持つ者達こそ真の臣下だ！そして、王は孤高に非ず！」

チラリとセイバー・キャスターを見て再び声を上げる

「・・・王とは！・・・誰よりも鮮烈に生き、諸人を常に魅了し続ける者を指す言葉！全ての勇者を羨望させ！民に道を示し！誰よりも高い頂きを常に見続け！その全てを体現する偉志を総算させる故に！・・・」

「「然り！ 然り！ 然り！」」

征服王は高らかに宣言し、その最強の軍勢達は声を揃えて肯定する。

正に圧巻という言葉が似合う切り札。

『絶対の信頼という絆』

セイバーは手に入れられなかったそれに心を震わせずにはいられない。

それが無い故に滅んだと言わんとするように。

「さあ！ 今宵の宴に来た王達よ！王に従った軍神よ！そして王を否定する聖女よ！！我等の姿をその目に焼きつけよ！・・・さあ、始めるとしようか、アサシン？」

ついに王の軍勢達は目の前の暗殺者達へと武器を向け、緊張した空気は重い沈黙を成す。

「蹂躪せよ！」

その沈黙を、征服王は己の剣をアサシンの集団へと向けて斬り払う。

「「「AAAAA L a L a L a L a e i ! ! !」」」

征服王の号令の下、軍団は進み行く。

アサシン達は呆然と立ち尽くし、逃げ惑い、自棄を起こして死を覚悟して迎え撃った。

しかし、王の軍勢はついに止まる事は無く、アサシンは黒い灰とな

って掻き消える事となる。

これで本当の意味でアサシンは最初に脱落したのであった。

王道（後書き）

感想、お待ちしております。

戦争（前書き）

書いた！！

・・・最近、『ドリフターズ』という漫画にはまりました。そして幸先がいいようにL.O.V.にてジャンヌ・ダルクを当てた・・・此れが神からの神告なのだろうか、この小説を書けとっているのだろうか・・・

戦争

「幕切れは興ざめであつたな」

杯に残つた酒を呷る。セイバーは応じる言葉を持たず、アーチャーは不機嫌そうに鼻を鳴らし、ランサーは拍手を送っており、キャスターは黙っていた。

「臣下の絆を宝具にまで昇華するとはな……見事、としか言えないなライダーよ。」とランサーは賞賛していた。ここまで出来るものなどそういないだろうと思つての事だろう。

「……雑種ばかりでもあれだけの数を束ねれば王と息巻くようになるか。——ライダー。やはり貴様は目障りだ」

「言つておれ。余と貴様はその内雌雄を決することになるであろうよ。」

アーチャーの言葉を笑つて受け流し、ライダーは腰に着けていたキュプリオトの剣を虚空に一閃し、神牛が引く戦車を具現させる。

「語るべきことは語り合つた。今宵はここまでとしようぞ。」

しかし、アーチャーとライダーに扱き下ろされたままのセイバーが納得するわけもなく帰ろうとするライダーに噛み付く。

「待てライダー、私はまだ——」

「黙れ小娘」

突き放すようにライダーが言葉を阻む。

「今宵は王が語らう宴であつた。しかし余は貴様を王として認めん」

「・・・あくまで愚弄するかライダー」

語気を荒げるセイバーだが、それを憐れむように一瞥し、ライダーはケイネス達と共に戦車に乗り込む。

「なあ小娘よ。そろそろ夢から醒めたらどうだ？　そうでなければ貴様は英雄として最低限の誇りすら失う羽目になるぞ。……貴様の語る王道とやらはそういう呪いだ」

「いや、私は――！」

「そうだな、話は終わっていないぞ、ライダー。」

セイバーの言葉を最後まで言わせずキャスターが待ったをかけた。

「む・・・キャスターよ、どうした。」

どこかつまらなそうにキャスターを見つめるライダー。矢張り、セイバーと同じ願いを持つキャスターをそう見ざるを得ないようだ。

「いやなに・・・私は貴様が嫌いだ・・・王が嫌いだ・・・しかし、あの軍団は良かった。」

とキャスターは素直な感想を述べ周囲を驚かせた。そして・・・

「故に・・・聖少女の戦功！」
オルレアン

剣を抜き放ち、宝具を開放させた。

「故に貴様を此処で葬る。安心しろ、戦場は此処ではないぞ？」

「ふむ・・・しかし、宴の後だぞ。少しは余裕を持って

「知った事か。ましてや王がグダグダ抜かすな、品を落すぞ。」

最早キャスターは止まらない・・・ましてや。

「そうだぜ！アンナン見せられて気分が絶好調なんだ！ここで退いたら男が廃るぜ！」

と、龍之介もノリノリであった・・・ホントの所。

『此処からは好きにやるか・・・何時死んでも可笑しくない戦場にいるんだ。キャスターの・・・旦那の為にもやってやるぞ！！』

と自棄に成りながらも自我を持ち、戦場に向かおうとしていたのであった。

ケイネスは仕方ないと振り返り、

「では明日の夕暮れ、冬木大橋にて対決させよう。安心したまえ、結界等は此方が用意しておこう。

と宣戦布告を受け取ったのだ。恐らく、ライダーの宝具があればどの物なのだ。キャスター如きに遅れはとらないと高を括ったのである。

「・・・あい分かった。依存は無い。」とキャスターは剣を納め、城を跡に使用として

「待つてください、キャスター。」セイバーに呼び止められた。

キャスターは無言で振り返るとセイバーはどこか悩みながらキャスターに質問した。

「貴女は・・・私が国を救いたいという願いは・・・無意味だと思うか？」

「・・・」

どこか儚く、触れれば砕けてしまいそうなセイバーは言葉を繋げる。

「私は・・・国を救おうと・・・王であろうと必死だった・・・民を幸せにしたいという願いは夢物語だと思うか？」

キャスターは一通り聞いて溜息をつき、告げた。

「・・・国を、民を見る前にまだ見るべきものがあるぞ、騎士王。ましてやその問に答えるのは私でも、ライダーでもアーチャーでもない・・・私を知る限りその問に答えられるのは唯一人・・・バーサーカーのみだ。」

そいうとキャスターは龍之介と友に城を後にする。

「ま、待つてください！なぜバーサーカーが「バーサーカー」の正体を貴女は未だ判らない、とでも？」そ、それは・・・「そいうとキャスターは一度振り返り、

「アーサー王よ・・・貴殿は既に知っておろう。知っていて・・・その問が判らないのだろぅ。・・・ならば、先ずそれを片付ける。

マスターがグダグダ抜かすなら殴ってでも了承させる。でなければ・
・お前は前に進めないだろう。」

こうしてキャスターは去っていった。

「セイバー、バーサーカーの正体・・判っていたの？」とアイリスフィールはセイバーに問いかける。

セイバーは視線を落しながら答えた。

セイバーは知っていた・・いや、知ってしまった。初戦にてランサーがバーサーカーを打ち据えたとき、兜の一部が碎けその顔を曝け出していたのだ。故に知ってしまった。かの武人の名を。共に戦場を駆け抜け、最も信頼を置いた騎士の姿を忘れるわけが無い。

「・・・バーサーカーの正体は・・湖の騎士、サー・ランスロットです。」

「え！そんな・・。」

アイリスフィールは驚く。無理も無い、円卓の最強の一角にいるランスロットがバーサーカーとして召喚されていたのだ。ましてや、セイバーに憎悪を持って。

「・・・判りました。」とセイバーは空を見上げ月に手を翳した言い放つ。

「明日、キャスターとライダーの戦いを見守った後、バーサーカーに……ランスロット卿に会ってきます。」

「セ、セイバー！」

「許してくださいアイリスフィール、そして切嗣。どうしても言うなら令呪を使ってください。私を戦うだけの狂戦士にしてください。」

セイバーはそれだけをいうと城に戻っていった。

その決意は、アイリスフィール心配させ……切嗣は頭を抱えさせた。

そして、翌日の冬木大橋。人気もいなくなり……其処にいるのはライダーとケイネス、キャスターと龍之介。

それを見守るようにランサー・ソラウ・ウェイバー（ソラウに引き摺られて）・セイバー・アイリスフィール・アーチャーが冬樹大橋に集合していた。

「……此れより開戦といきましょう、ライダー。」「おうよ。」

とキャスターとライダーは歩を進め、景色を変えた。

殺風景な橋から、壮大な大地に変わったのだ。そして、ライダーの背後には数多の軍勢が待ち構えていた。

「さあ、来るといい！キャスター！！」とライダーも待っていた。

あの光景を目にして恐れず、即座に宣戦布告したのだ。キャスターに期待しているのであろう。

対するキャスターは、

「龍之介、令呪を使用します。」

「え？・・・OKOK。で、なんてお願いすればいい？」

「いえ、唯見守っててください・・・このキャスター。この戦争に命をかけます。」

そういうとキャスターは剣を自らの肩に突き刺して言い放つ。

「令呪よ。その一角を持って我が願いを聞きいれよ。令呪よ、我が願いの結晶を放ちたまえ。さあ、参ろう戦友たちよ。此度の戦いは私事。されど我が願い聞き入れるならば、共に駆けよう！」

そして、世界が半分変わっていく。

砂漠が潤う草原になっていく。暑き太陽が、抱擁ある光で照らす。

其処はもう一つの世界。皆が理解した。この世界がキャスターの世界だと。

この世界こそ、ライダー同様EX宝具『ブレイドストーム百年戦争』である。

「ライダーよ、お前の絆の重さを知った。だが、それはお前だけが持つ者にあらず！」

そういうとキャスターの後方から騎馬の足音が近づいてくる。やが

て騎士団は見事な列を整え、整列した。中世の騎士団。その軍団に名前は無い。唯一つ判るのは、彼らはジャンヌ・ダルクと共に戦場を駆けつけた猛者であること。その内の一騎の騎士が見事な白馬の手綱を持ってキャスターに渡す。そして、キャスターは其れに跨りもう一つの宝具を開放した。

「百合と天使が舞う先陣旗^{ラ・ビュセル}！！」

手にしたのはジャンヌ・ダルクを象徴する旗。天使と百合の描かれた三角旗にしてオルレアンの包囲網の突破した時に使用した物だ。

キャスターは旗を振り味方を鼓舞する。そして、

「行くぞ、ライダー。この戦場に言葉は要らない。貴様の王道は私が砕く。もしくは貴様が私を屈服させる。それだけだ！！」

「面白い・・・実に面白いぞ、キャスター！！いくぞ、朋友たちよ。敵は昨日の烏合の集団に非ず。敵は劣勢から戦況を覆した不屈の騎士団。相手にとって不足あらず！！いざ行かん！A A A A A L a L a L a i e！！！！」

ここに、古代最強軍団と中世騎士団が激突したのであった。

戦争（後書き）

というわけで。

・キャスター悩み相談室

・セイバーの決意

・古代VS中世

でお送りしました。

また、次回会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437y/>

殺人鬼に憑依したら聖処女と共に戦争に巻き込まれた

2011年12月22日12時55分発行